

# 聖所は回復される

ピーター・C・ジャーネス



THE  
SANCTUARY  
RESTORED

THE  
SANCTUARY  
RESTORED

聖所は回復される

ピーター・C・ジャーネス

アメリカ合衆国ネブラスカ州リンカーン市  
コロンビアユニオン大学 宗教学部長

## まえがき

「聖所は回復される」の予備版の読者から、次のような手紙を受け取った。その方の許しを得てここで使わせて頂く。

親愛なるジャーネス長老へ

あなたの新書「聖所は回復される」を読んで、戦慄を覚えるとともに祝福をも頂きました。書名は最も適切なものだと思います。なぜなら、本書を研究すると、我々の再臨運動の基礎である重大な聖所のメッセージに対する愛と理解が心と思いの中で増し加えられるからです。

どういうわけかここ数年わが教会の強調点の中で、この重大な真理の光はかすみ、徐々に消えて行きました。それは我々の初期の先駆者たちの中心的なテーマでありました。エドソン、クロージャー、ホワイト、ハスケル、ワゴナー、ジョーンズ、ギルバート、そしてアンデレアセン、彼らはその著述の中でこの力ある真理を詳しく説明して、人々が固く立つようにしました。ここ数年我々の牧師の誰も、聖所の教理に関する本を書いていないということは、何と残念なことでしょうか。「預言の霊」以外には、この真理に関する深い研究を提供してくれる書物を我々の出版物から見つけることは大変難しいのであります。

神を賛美いたします。神は、この重要な主題について書き表すようにとあなたに印象づけてくださり、この最も象徴的で意義深い儀式の中で神が我々に示そうと熱望しておられることの現実に取り組むための理解力をあなたに与えてくださったのですから。過去において、聖所とその儀式は、大変興味深いものであるにも関わらず、クリスチャン経験にわずかな影響しか与えてこなかったのです。私の願いは、聖霊が、本当に「聖所は清められてその正しい状態に復する」（ダニエル 8:14）というこの本のメッセージを祝福してくださり、神の民の思考の中にそのメッセージを入れてくださることです。

初めの再臨運動において、我々を一つの民となした重大な真理は、意見の著しい相違が兄弟間に現れながらも、自由な議論を経て発展して行きました。しかし、相違があったとは言え、これらの兄弟たちは誠実なクリスチャンとして互いを尊敬し合いました。彼らが研究を続けていくうちに、神は完全な真理を彼らに啓示し、「預言の霊」によってそれを確認してくださいました。ありがたいことに、ある要点に関して間違った立場をとっていた人々は、自分の間違いを認めて、その見解を変更するだけの謙遜さを持ち合わせていました。今日も同じ愛の精神と完全な真理の探究が広がることをお祈りいたします。

本書の中であなたは、教理のある要点に関して兄弟のある方々の意見に意義を唱えておりましたが、そうする時、彼らの中傷しようとしていたわけではなく、またクリスチャン同志としての彼らの誠実さを疑っていたわけでもありませんでした。これらの兄弟たちは、あなたもそうしているように、自分たちの確信を書き記したに過ぎないのであります。願わくは、皆が意欲的にこれらの立場を「聖書（教）」と「証の書（あかし）」（イザヤ 8:20 参照）とに比較し、研究するようになるために、神が人々の心を謙虚にしてくださいるように。そのとき、我々の見解がどのようなものであろうとも、聖霊が正しい解釈を我々に示してくださり、確信してそれを受け入れることができるのです。次の引用文が最も適切なものでしょう。

「意見を異にする点を持ち出すとき、神のみことばを理解したいと熱心に求める人はキリストのような懇切な態度を示さねばなりません。おのおの真理が何であるかを自分でよく知るため、真理を率直に研究する自由が与えられなければなりません。・・・

尊い光が神のみことばから輝き出なければなりません。ですからだれでも、神がお送りになる光の使命のどの部分を人に教える

ように、またどの部分を教えるはならないなどと、あえて命令したりすることによって、神のみたまを消してはなりません。どのように権威ある地位にある人でも、人々から光をさえぎる権利はありません。」—安息日学校への勧告 25, 26

私は、我が民の殆どが聖所の教理と、アザゼルのやぎの処理（レビ記 16 章参照）を含めてその教理に付随した真理を本当に理解していないことを大変懸念しております。これは、他のグループがしばしば攻撃する、我々の教えの一つであります。どれだけのわが民が、あるいは牧師でさえ、この真理についての明確な解説ができるでしょうか。わが民は、これらの重大なテーマを研究し、その説明方法を学ぶよう奨励され、また刺激されなければなりません。

「・・・しかしもし神がわたしによってお語りになった通りだとすれば、我々は議会や何千という人々の前にみ名のゆえに連れ出され、各自が信仰の理由を述べなければならない時が来るであろう。その時、真理のために取らされてきた全ての立場に対して、最も激しい非難が浴びせられるであろう。であるから我々は、我々の擁護する教理をなぜ信じるかを知るために、神の言葉を学ぶ必要がある。」—レビュー・アンド・ヘラルド誌 1888年 12月 18日

私の願いは、神が、指導的な立場にいる我々の兄弟やあらゆるところの教会員たちに本書のメッセージを研究し、これを広く配布すべきだという印象を与えてくださることです。もし彼らがこれは正しくないと感じる解釈の点があるならば、それらは公然かつ公平に論じ合われるべきであります。そしてそれらが神のみ言葉に照らし合わせて間違いであることが証明されたならば、我々は皆、喜んで我々の教えを訂正すべきで

あります。

本書を読んで私は、イエスが高められていることを、また至聖所における我々のための御業についてのより完全な見解を持つことができたことを証言せずにはいられません。彼に対する私の信仰と、約束して下さったとおりに彼が我々のうちになし得ることに對する私の信仰は、これまで以上に確固たるものとなりました。更に本書は、再臨運動、そして第三天の使命の不動の高台に対する私の確信を強め、また、この尊い使命をあらゆる部族、国民に伝えるという新たな決心をさせてくれました。本書によって私は、兄弟たちと共にキリストの内にある一致をますます切に望むようになりました。しかし、我々が皆、「小羊の行く所へは、どこへでも」ついて行き、至聖所の中のキリストとの完全な一致を求めて、信仰によって聖所に集まる時のみ、我々は真に一致することができるのだということを、本書は私に気づかせてくれました。

私の願いは、本書を研究するすべての方々がこのセブンスデー・アドベンチストの信仰の「基礎であり、中心的な柱」についての新たな見解を持つようになることでもあります。

ロン・カミングス  
牧師—伝道者  
カナダ

今日我々は最後の危機の門口に立っている。この時代に関連する偉大な真理に向って、我々一人一人は永遠の結果を左右する判決に直面している。

一つの民として、我々は各時代にわたって蓄積された光に対する責任を負っている。この光は、16世紀のプロテスタント宗教改革において、新しい強調で世界を照らした。そして再臨運動は、裁きの時のメッセージを頂点に至らせることによって、あの大宗教改革を補って完成させるものであることが明らかにわかる。

プロテスタント教会もアドベンチスト教会も、個人的なみ言葉の探求から起こった。そして、我々がどのような時代にもなかったような危機に近づくにつれて、この個人個人の負う、聖書の聖なる記録から輝く光に対する責任は、増大して行くのである。

光を軽視することは不忠であり、真理に反対して戦うことは背教である。しかし宗教的な重大局面において中立の立場を取ることは、神の政府に敵対する最も重い反逆罪なのである。人は誤ってきたし、誤るであろう。しかし神の言葉はとこしえに堅く立つ。そして今日み言葉でその一生を堅固にする者だけが、最後の争闘に立つことができるのである。

読者には、神の靈感の記録のサーチライトで照らして本書を研究していただきたいと願うものである。このメッセージが読者の心を鼓舞してたぐいもない経験に導き入れ、そして永遠の約束が最後の世代に成就するよう祈りたい。

ピーター・C・ジャーネス

注：

「教理に関する質問」、「我らの義キリスト」、「我らの高き召し」、「神の息子、娘たち」、「天国の場所において」、「レビュー・アンド・ヘラルド」誌（言明されていないかぎり）、「セブンスデー・アドベンチスト聖書注解」からの引用文は全て、エレン・G・ホワイトの著述である。読者にとって理解の助けとなる箇所には、引用文を含めて、本書全体にわたり強調が付け加えられている。

## 原作の発行人

Peter C. Jarnes

Post Office Box 6237

Lincoln, Nebraska 68506

U. S. A.

初版、1968年

改訂版、1969年

## E・G・ホワイト著書略名

### 略名 書名

1BC	The Seventh-day Adventist Bible Commentary, vol. 1 (2BC, etc., for vols. 2-7)
	セブンスデー・アドベンチスト聖書注解、第1巻（第2巻は2BC、全集7巻まで）
CT	Counsels to Teachers, Parents, and Students 教師・両親・生徒への勧告
CW	Counsels to Writers and Editors 著者・編集者への勧告
Ev	Evangelism 伝道
FE	Fundamentals of Christian Education クリスマン教育の基礎
GW	Gospel Workers 福音宣伝者
3SG	Spiritual Gifts, vol. 3 霊の賜物、第3巻
1SM	Selected Messages, book 1 (2SM etc. for books 2 and 3) セレクトッド・メッセージズ、第1巻（第2巻、3巻は2SM、3SM）
IT	Testimonies for the Church, vol. 1 (2T, etc., for vols. 2-9) 教会への証、第1巻（第2巻は2T、全集9巻まで）
TM	Testimonies to Ministers and Gospel Workers 牧師と福音宣伝者への証
あ上、下	人類のあけぼの・上巻、下巻
国上、下	国と指導者・上巻、下巻
希上、中、下	各時代の希望・上巻、中巻、下巻
患上、下	患難から栄光へ・上巻、下巻
大上、下	各時代の争闘・上巻、下巻
キ実	キリストの実物教訓
キ道	キリストへの道
初文	初代文集
教育	教育
青年	青年への使命
生残	生き残る人々
ミニ	ミニストリー・オブ・ヒーリング
家教	家庭の教育

注：

The Review and Herald（「レビュー・アンド・ヘラルド」誌）の略名はRHとする。

## 目次

第1章	聖所とダニエル 8 : 1 4	1
第2章	レビ記 16 章	8
第3章	原罪とダニエル 8 : 1 4	22
第4章	聖徒の完全とダニエル 8 : 1 4	39
第5章	最後の贖い	46
第6章	生ける者の裁きと 18 章	57
第7章	日曜休業令と黙示録 18 章	66
第8章	最後の世代	80
第9章	キリストの苦悩とダニエル 8 : 1 4	87

「二千三百日までである(欽定訳)。  
そして(それから)聖所は清められて  
その正しい状態に復する。」

—ダニエル



## E・G・ホワイトは聖所の 研究を強調している

再臨運動は聖所から誕生し、ダニエル 8:14 の独特な理解と共に成長した。事実、それだけがセブンスデー・アドベンチストがキリスト教真理に貢献した唯一独特の教理である。アドベンチスト神学の全体系を支えるものは、この重要な聖所の教理である。

次の預言の霊の引用文が示しているように、靈感は聖所の真理を理解することの重要性を繰り返し強調している。

「再臨の信仰にとって、他のどんなものよりも土台石となり大黒柱となっていたものは、『二千三百の朝夕を重ねるまでかくてあらん。しかして聖所は潔めらるべし』と宣言されている聖句だった。」—生残 422

「天の聖所の奉仕を正しく理解することが我々の信仰の土台である。」—Ev 221

「聖所問題が、1844年の失望の秘密を解くかぎであった。それは、互いに関連し調和する真理の全体系を明らかにし、神のみ手が大再臨運動を導いてきたことを示し、そして、神の民の立場と働きとをはっきりさせて、今なすべきことを明らかにした。・・・聖所からの光が、過去と現在と未来を照らした。」—大下 138, 139

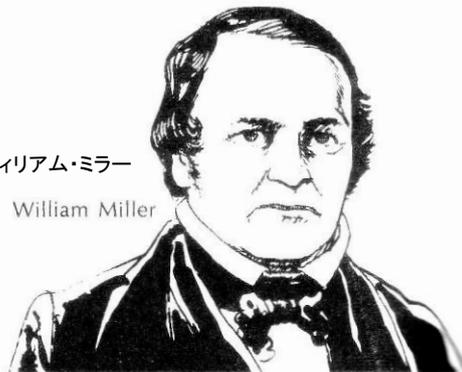
「我々は大いなるあがないの日に住んでいる。天の聖所においてキリストが神の民のためになしておられる聖なる働き—そして今進行中の働き—は我々の絶えざる研究でなければならない。」—5T 520

「二千三百日に関連した聖所問題、また神の律法とイエスの信仰などの問題は、過去の再臨運動を説明して、われわれの現在の立場を示し、疑う者の信仰を確立し、輝かしい将来に対する確信を与えるように十分に計画されたものである。わたしはしばしばこれらが、使命者たちが詳しく話すべき重要な問題であることを見た。」—初文 138

「聖所と調査審判の問題は、神の民によってはっきりと理解されねばならない。すべての者は、自分たちの大いなる大祭司キリストの立場と働きについて、自分で知っている必要がある。そうしなければ、この時代にあっ

ウィリアム・ミラー

William Miller



## 働きを完成するためのかぎ

て必要な信仰を働かせることも、神が彼らのために計画しておられる立場を占めることもできなくなる。」—大下 222

「天の聖所における、人類のためのキリストのとりなしは、キリストの十字架上の死と同様に、救いの計画にとって欠くことのできないものである。」—大下 222

「民として我々は熱心な預言の研究者でなければならない。ダニエルとヨハネの幻に示されている聖所の主題に関して知的になるまで、我々は気を休めてはならない。この主題は我々の現代の立場と働きに大いなる光を投げかけていて、我々の過去の経験において神が導かれた事の間違いのない証拠を与えるのである。」—Ev 222, 223

「1844年に起こった出来事は、大事件であり、天において行われる聖所の清めは、地上における神の民と決定的な関係があることを明らかに示し、我々の目を驚かせた。」—CW 30

再臨運動のメッセージと働きを展開は、ダニエル 8:14 の意味を明らかにすることの直接的な結果として起こった。ウィリアム・ミラーが初めてダニエル 8:14 を理解したとき、黙示録 14:7 の第一天使のメッセージが発せられ始めた。ダニエル 8:14 に関するさらに進んだ光がサムエル・スノーに与えられたとき、第二天使のメッセージが「夜中の叫び」の力と共に発せられた。1844年の「大失望」の後、聖所に関する徹底的な研究がなされた。そして再臨信徒たちが彼らの大祭司について行き至聖所に入って行った時、第三天使のメッセージが誕生した。(初文 414, 423)

今日教会のための考察すべき質問は、次の通りである：

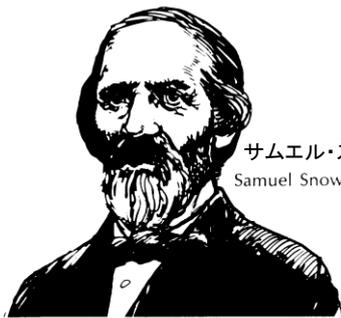
もしダニエル 8:14 の理解の展開が、第一、第二、そして第三天使の使命をもたらしたのであるならば、ダニエル 8:14 の完全な啓示が、やがて来る力強い第四天使の光をもたらすはずではないだろうか。その時、第三天使に合流して、大いなる叫びへと膨れ上がるのである(黙示録 18:1)。

この考えは単なる推測ではない。ある印象的な引用文の中で主のしもべは、ダニエル 8:14 をもっと良く理解することが働きを完成する真のかぎを握っているということを示している：

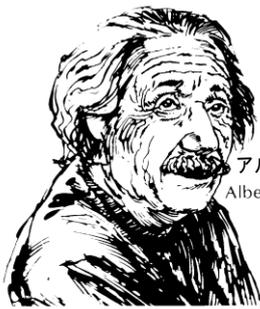
「すべてのものは、天の聖所において進行中のあがないの働きに関してもっと知的になる必要がある。この偉大な真理が悟られ、理解されるならば、それをしっかり把握する者たちは、人々を神の大いなる日に立ちうるように備えさせるために、キリストと協力して働くであろう。そして彼らの働きは成功するであろう。」—5T 575

上の引用文は、強く印象を与える次の幻と比較されるべきである：

「夜中に、私は夢の中で、牧師たちとその



サムエル・スノー  
Samuel Snow



アルベルト・アインシュタイン  
Albert Einstein



D. K. ショート  
D. K. Short

妻、そしてその子供たちと共に大きな集会の中にいた。私は、そこにいたほとんどの人々が牧師たちとその家族であったことを不思議に思った。彼らの前にダニエル、ゼパニヤ、ハガイ、ゼカリヤに関連したマラキの預言が示された。これらの書卷の教えが注意深く研究された。神殿の建設や神殿の奉仕が考察された。神殿の奉仕に関係するあらゆることの神聖な性質について、聖書が綿密に調べられた。預言者たちを通して、神はこの地上歴史の最終時代に起こるであろうことの描写を与えてくださった。そしてユダヤ制度は我々のための教訓で満ちている。・・・

私の夢の中でこれらの事柄は、この人々によって念入りに研究された。聖句は聖句と比較され、神のみ言葉が我々の時代に適用されていた。聖書が勤勉に考察された後、静かなひと時があった。非常に厳粛な感銘がその人々に与えられた。神の霊の深い感動が我々の間に見られた。」—RH 1902年2月4日

ダニエル 8:14 が、後の雨を受けて働きを完成させるための鍵を握っているのだから、この歴史的な事実について考察することは、重要ではないはずがない。事実、それは過去のラオデキヤの自己満足と未来の再臨運動の勝利を説明するかぎなのである。アドベンチスト教会を誕生させたのみならず、ラオデキヤの行き詰まりを終わらせて、教会に勝利への最後の行進を始めさせる真理の重要性を、神の民は必死になって再研究そして再発見する必要がある。

今日、聖所の教理は十分に重要視されていない。サタンがそうしているのであろう。なぜなら、彼はその教理が「我々を分かつた民とし、我々の働きに性質と力を与えたメッセージのもの」(CW 54、大下 221)であることを知っているからである。

聖所の主題、生ける者のさばき、及びそれに類似した真理を教会の人々に生き生きと提示すると、多くの教会員は、「私は、示されたこ

のような主題をもう何年も聞いたことがない！」と声を上げる。

我々の出版の働きで、ブック・アンド・バイブル・ハウスが聖所の専門書を取り扱うことが少なくなってきたことは、誠に憂慮すべきことである。スミス、ハスケル、ギルバート、そしてアンデレアセンたちのような著者によって書かれた聖所に関する本は、アドベンチストの歴史を通じて常に入手可能であった。現在では、教会は何も持っていない。

1958年にD・K・ショート長老は、ダニエル 8:14に含まれている真理の可能性について注目に値する解説を示した。彼は次のように書いた：

「近年、科学界の中に、残りの教会の手の内にある計り知れない可能性についての感銘を与える描写があった。1905年、アルバート・アインシュタインは特殊相対性理論の方程式を公式化した。40年後の1945年、その理論の直接の結果として、最初の原子爆弾が爆発し、原子力時代が誕生した。1905年には、ただ理論だけが存在しており、紙の上にただいくらかの記号が記録されているだけであった。しかしこれらに内在していたものは、山を動かし、太陽と相等しい光を生み出すほどの威力であった。アインシュタインの公式が生きた活力みなぎる製造物、前提の著名な証拠となるのに、40年がかかった。

百数年前、セブンスデー・アドベンチストの父祖に与えられた公式、方程式があった。それは依然として、まだまだ、ただの紙面上の記録でしかない。今日までのところ、その方程式は真実にその効力を試されてはいない。けれども、この方程式に内在している力は、宇宙の創造主の力の総計である。アドベンチストたちは、かつて人間が見たことのないほどの栄光で全地を照らすための力を、彼

らの手の届く範囲内に持っている。この民が所有している真理は、各時代のすべての哲学者たちによって考え出されたあらゆる思想の宝石に勝っている。それは、この民を『頭』とするために、単に、満足させる、言葉を飾り立てた表現法ではない。

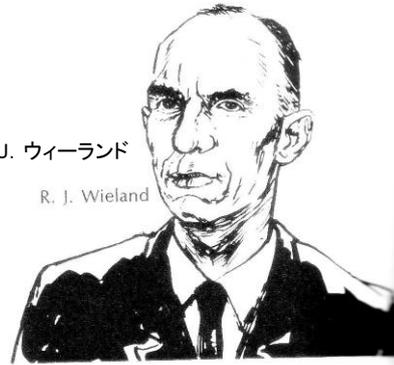
このメッセージの先駆者たちは、祈り、信仰そして神の言葉の研究によって、サタンとそのすべての使いたちによって反論することのできない真理のとりでを確立した。先駆者たちは『現代の真理』を持っていた。そしてその真理は今日もなお真実であるのに、現代の真理として扱われていない。アインシュタインの方程式の真理は今日にいたるまで、これっぽっちも変えられてもいなければ減らされてもいない。そして、彼の公式の本当の真理は、それが生み出した製品によって実証された。こうしてそれは『現代の真理』とされたのである。残りの教会の手の内にある公式の真理も、それが作り出す製品によって実証されなければならない。百年が過ぎ去り、地は今もなお『彼の栄光によって明るく』されるのを待っているにもかかわらず、方程式は依然として、ただの理論でしかない。しかしそれは必ず証明されるであろう。その産物は信頼できるものであり、その結果は確かなものである」。<sup>1</sup>

---

<sup>1</sup> ドナルド・K・ショート、「今日の宗派の歴史に関する聖所の清めの研究」、1958年10月、94、95ページ

R. J. ウィーランド

R. J. Wieland



## 保守主義と自由主義

ダニエル 8:14 に関するショート長老の立場は、「保守主義」でも「自由主義」でもない。保守主義者とは、「古き良き教理」に固執はするが、師父たちが述べたことを、その真実性や開拓者たちの信仰との有力な関連性を探求もせず、ただ繰り返し伝えることに満足している人のことである。保守主義の場合、真理はその力を失っている。なぜならそれは「現代の真理」となることをやめているからである。他方、開拓者の抱いていたアドベンチストの聖所の信仰に対して何の敬意も持たない、自由主義の分子が教会内に増えてきている。この部類の人々にとっては、ダニエル 8:14 に重大な意味はない。事実、ダニエル 8:14 の歴史的な理解において、まったく信仰のない、「知識主義者」の階層が大きくなりつつある。

真の姿勢は、保守主義と自由主義の間になければならない。(エレン・ホワイトは、どちらの語句も肯定的な意味合いで用いたことは決してなかった。) 現代の真理は、過去に確立された立場にしっかりと錨を降ろしてはいるが、神の教会とそれ自身との関連性においての増し加わる理解によって、その真理は活気づくのである。R・J・ウィーランド長老は以下のコメントでそのことを要約している：

「もし我々の青年層あるいは牧師たちのわずかな者しか、彼らの生きている間に主が再び来られるという堅い確信がないならば、どれほどの者が 1844 年は重要であるという知的で意義深い確信を持っているだろうか。もし『調査審判』の概念がアベルの時代以来の死んだ者だけの記録を調べることに限定されるとしたら、たまたもし『審判』の時期が『各時代の争闘』の書かれた時までにはほぼ完了していたとするならば(大下 224 を比較参照せよ)、そしてもし『審判』の進行が一貫して事例の調査だけで決定されるとすれば、なぜ 70 年、80 年、あるいはもっと長い年月という、この説明のつかない沈黙の遅延があるのだろうか。深く思索してしまう人

なら、天の法廷が一時的に休廷しているのか、あるいは『各時代の争闘』が書かれた後の予期しなかった世界人口爆発に対処するのに法廷の『機械』の処理能力が低いことが判明したのか、などをただ問うことであろう。たとえある正直で思索的な人が、『調査審判』や『最後の贖い』の見解を丸ごと、『リフォーム・ドレス』といっしょにアドベンチストの屋根裏部屋に押し込んだとしても驚くには及ばない。この危機にあって我々には責任がないだろうか。なおざりにされているキリスト論の見地が、この霊的欠乏を満たしてくれるのではないだろうか。

「我々は、歴史的緊急事態と人類は発展しているという抑え難い思想の故に、我々の教理的な遺産の意味をもっと深く理解しなければならぬ事態に厳しく追い詰められている。セブンスデー・アドベンチストにしか与えられていない教理は、『聖所の清め』、『最後の贖い』の教理である。その教理から『作り話的な要素を取り除くこと』は不可能である。なぜなら、それには『作り話』など無いからである。しかし我々はせめて、この教理を硬くならないようにし、不可解なものにしないようにしなければならない。それが押し込まれている、かび臭い、神学の屋根裏部屋から降ろしてあげなければならない。それを使用可能なものにし、それに生气を与えなければならない。さもなければ、我々は永遠の悲しみを刈り取るべき者に値する」。<sup>2</sup>

<sup>2</sup> ロバート・J・ウィーランド、「キリスト論と人間の潜在意識」、7, 39 ページ

この出版物は、1844年の2300日、または審判の開始、そして罪の除去などの信憑性については取り扱っていない（大下218, 219参照）。敬虔な学者たちのグループが既に全生涯を費やしてこれらの事柄を確立したのである。しかし確立された真理を保持する一方で、ただの形式や終末の諸事件の大要だけに満足してはならない。むしろ、聖所の真髓を理解することを求めなければならない。1844年に至聖所が開かれたことは、全地を照らす福音の完全な啓示の始まりである。

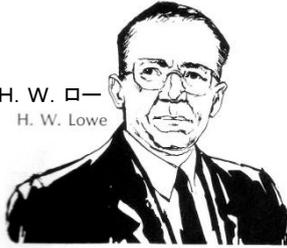
「この日にあなたがたのため、  
あなたがたを清めるために、  
あがないがなされ、  
あなたがたは主の前に、  
もろもろの罪が清められるからである」  
—モーセ

# レビ記 16 章

G. D. ケーフ  
G. D. Keough

# 2

H. W. ロー  
H. W. Lowe



L. C. ネーデン  
L. C. Naden



W. P. ブラドリー  
W. P. Bradley



レビ記 16 章を読むと、あがないの日はさばきの日であったばかりでなく、神の民の清めの時でもあった。ある人たちは、あがないの日に幕屋だけが清められたと考える人がいる。しかし、レビ記 16 章はこの考えを支持していない。あがないは全聖所と民のためにも同じようになされたのであった。

「イスラエルの人々の汚れと、そのとが、すなわち、彼らのもろもろの罪のゆえに、聖所のためにあがないをしなければならない。また彼らの汚れのうち、彼らと共にある会見の幕屋のためにも、そのようにしなければならない。彼が聖所であがないをするためには、いった時は、自分と自分の家族と、イスラエルの全会衆とのために、あがないをなし終えて出るまで、だれも会見の幕屋の内にはならない。…

この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである。…

彼は至聖所のために、あがないをなし、また会見の幕屋のためと、祭壇のために、あがないをなし、また祭司たちのためと、民の全会衆のために、あがないをしなければならない。」—レビ 16:16, 17, 30, 33

ある人は、イスラエル人に提供された清めはただ単に法的な清めを意味したと考えている。したがって、天の聖所の最後の清めも、天の記録の書から法的に清める行為だけであると思っている：

## H. W. ロー

「それは天の記録からの罪の除去であって、調査審判において人間の記憶から除去されるのではない」<sup>1</sup>

## G. D. ケーフ

「そこに残るのは、ただ記録の取り消し、除去である。…この罪の取り消しは、ゆるされ、清められた罪人から断罪とする一切のものを取り除くことである。…それは彼の立場に影響を与えることは確かであり、彼のためのあがないではあるが、罪人その者になされるのではなく、聖句がはっきり言っているように「聖所の清め」なのであるということの間違ってはいけない」<sup>2</sup>

## R. F. コットレル

「したがって、レビ記 16:30 を今天で進行しつつある実体の大いなるあがないの日の間、神の民の道徳的な清めに適用したり、あるいは肉における道徳的完全と解釈することは、聖書を歪曲することである」<sup>3</sup>

## L. D. ネーデン

「聖書と預言の霊のどちらも、天の記録から罪を除去することと信者の生活から罪が除去されることが同時に起こるとの主張は支持していない」<sup>4</sup>

<sup>1</sup> H. W. ロー “The purpose of the Sanctuary Service”, RH, 4-9, 1964, p. 7

<sup>2</sup> G. D. Keough, “God’s power to Pardon and Forget”, Ministry, 6-1966, p. 37.

<sup>3</sup> R. F. コットレル “That Ye May Be Clean”, RH, 7-30, 1964, p. 13

<sup>4</sup> L. C. ネーデン “Christ’s Atoning Ministry” RH, 9-10, 1964, p. 4



## 聖徒たちの清め

「神は彼らの罪を除去なさり、聖所から取り除かれる。しかし、この除去は神の民から罪を取り除くことではない。…神の民から罪を除くことはすでになされていなければならない」<sup>5</sup>

### レビュー・アンド・ヘラルド編集者

「ある者たちはレビ 16:30 の『この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである』を誤って道徳的な清めに適用している」<sup>6</sup>

### W. P. ブラドリー

「特に受け入れられないのは、ダニエル 8:14 の聖所の清めを、キリストを信じる信仰によって成し遂げられる清めの働きとして人間の生活に適用することである。

「今何が起きているのだろうか？ さばきにおいて一人一人のケースが調べられている。忠実な者は神の律法に照らして義認される。その名は生命の書に残る。終わりの時に救われた者が印され、彼らの罪は記録から除去される。キリストは最後に至聖所から出てこられ、罪の責任をサタンの頭に移す。こういうことは天の聖所において法的に起こることで、魂の宮でなされることではない」<sup>7</sup>

<sup>5</sup> L. C. ネーデン "Christian Perfection, How Do We Attain it?" RH, 9-17, 1964, p. 3.

<sup>6</sup> レビュー・アンド・ヘラルド編集者、9-10、1964、p. 4

<sup>7</sup> W. P. ブラドリー "Limitations on Symbolism," Ministry, 10-1968, p. 21

セブンスデー・アドベンチストは黙示録 14:7 に述べられている審判は実体のあがないの日であることを知っている。それは神の民のためのあがないの日である。そのことが聖徒たちのために何かがなされることは聖書に明確に教えられている：

### モーセ

「この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである。」

「その日には、どのような仕事もしてはならない。これはあなたがたのために、あなたがたの神、主の前にあがないをなすべき贖罪の日だからである。」—レビ 23:28

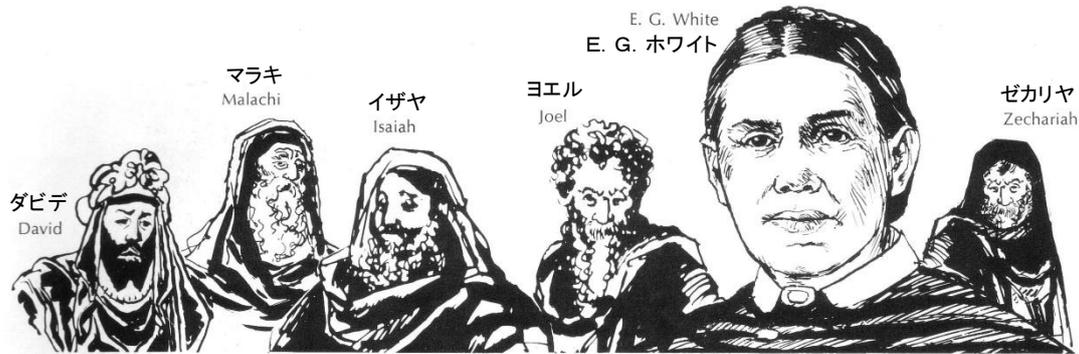
### ダニエル

「わたしが見ていると、もろもろのみ座が設けられて、日の老いたる者が座しておられた。……彼に仕える者は千々、彼の前にはべる者は万々、審判を行う者はその席に着き、かずかずの書き物が開かれた。

わたしが見ていると、この角は聖徒と戦って、彼らに勝ったが、ついに日の老いたる者がきて、いと高き者の聖徒のために審判をおこなった。そしてその時がきて、この聖徒たちは国を受けた。

彼は、いと高き者に敵して言葉を出し、かつ、いと高き者の聖徒を悩ます。彼はまた時と律法とを変えようと望む。聖徒はひと時と、ふた時と、半時の間、彼の手にとわたされる。

しかし審判が行われ、彼の主権は奪われて、永遠に滅び絶やされ」—ダニエル 7:9, 10, 21, 22, 5, 26



裁きの調査の面に強調が置かれるあまり、ダニエル7章の主要な点が忘れられてしまう。すなわち、聖徒たちのためのさばきであるということである。裁きにおいて聖徒たちはついに獣に勝利するのである。

## ダビデ

「彼は義をもってあなたの民をさばき、公平をもってあなたの貧しい者をさばくように。

彼は民の貧しい者の訴えを弁護し、乏しい者に救を与え、しえたげる者を打ち砕くように。

彼は刈り取った牧草の上に降る雨のごとく、地を潤す夕立のごとく臨むように。」—詩篇 72:2, 4, 6

## マラキ

「見よ、わたしはわが使者をつかわす。彼はわたしの前に道を備える。またあなたがたが求める所の主は、たちまちその宮に来る。見よ、あなたがたの喜ぶ契約の使者が来ると、万軍の主が言われる。その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう。彼は金をふきわける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである。彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる。その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる。」—マラキ 3:1-4<sup>8</sup>

<sup>8</sup> 大争闘下 139-142 によると、マラキ 3:1-4 はキリストが裁きに來られることを意味する。ダニエル 7:13 とダニエル 8:14 と同じ事

## イザヤ

その日、主の若枝は、麗しく、栄光に輝き、地の実は、イスラエルののがれた者の威光と飾りになる。シオンに残された者、エルサレムに残った者は、聖と呼ばれるようになる。みなエルサレムでいのちの書にしるされた者である。主が、さばきの霊と焼き尽くす霊によって、シオンの娘たちの汚れを洗い、エルサレムの血をその中からすすぎ清めるとき、主は、シオンの山のすべての場所とその会合の上に、昼は雲、夜は煙と燃える火の輝きを創造される。それはすべての栄光の上に、おおいとなり、仮庵となり(新改訳)、(天蓋—[神の愛と保護の] 要害(抄訳聖書))。—イザヤ 4:2-5<sup>9</sup>

## ヨエル

「あなたがたは断食を聖別し、聖会を召集し、長老たちを集め、国の民をことごとくあなたがたの神、主の家を集め、主に向かって叫べ。……シオンでラッパを吹きならせ。断食を聖別し、聖会を召集し、民を集め、会衆を聖別し、老人たちを集め、幼な子、乳のみ子を集め、花婿をその家から呼びだし、花嫁をそのへやから呼びだせ。主に仕える祭司たちは、廊と祭壇との間で泣いて言え、「主よ、あなたの民をゆるし、あなたの嗣業をもろもろの国民のうちに、そしりと笑い草にさせないでください。どうしてもろもろの国民に、『彼らの神はどこにいるのか』と言わせてよいでしょうか。」

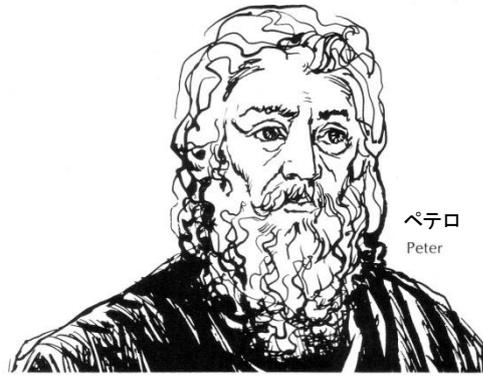
その時主は自分の地のために、ねたみを起し、その民をあわれまれた。主は答えて、そ

件であるとしている。

<sup>9</sup> 大争闘下 218 によるとイザヤ 4 章は裁きと罪の除去の時を言っていることは明確である。



エレミヤ  
Jeremiah



ペテロ  
Peter

の民に言われた、「見よ、わたしは穀物と新しい酒と油とをあなたがたに送る。あなたがたはこれを食べ飽きるのであろう。わたしは重ねてあなたがたにもろもろの国民のうちでそしりを受けさせない。わたしがあなたがたに送った大軍、すなわち群がるいなご、とびいなご、滅ぼすいなご、かみ食らういなごの食った年をわたしはあなたがたに償う。あなたがたは、じゅうぶん食べて飽き、あなたがたに不思議なわざをなされたあなたがたの神、主のみ名をほめたたえる。わが民は永遠にはずかしめられることがない。あなたがたはイスラエルのうちにわたしのいることを知り、主なるわたしがあなたがたの神であって、ほかはないことを知る。わが民は永遠にはずかしめられることがない。

その後わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ。あなたがたのむすこ、娘は預言をし、あなたがたの老人たちは夢を見、あなたがたの若者たちは幻を見る。」—ヨエル 1:14、2:15-19、25-28

ヨエル書に言われている聖会とは、昔のあがないの日の「聖会」での実体の聖会のことである。ユダヤの儀式で、ラッパを吹きならす(雄羊の)、断食、すべての者を聖会に召集するなどの表現は、実態の贖いの日のことを指している(レビ 23:27-32、大下 399-11、6T 408、409)。魂を悩ます者たちのために大祭司によってなされる清めは、実体において聖徒たちに後の雨を注ぐことによって成就することを表していた(TM 506)。<sup>10</sup>

<sup>10</sup> 1 T179-183 (初代 437-441) の教会において起こる震いは、ヨエル 2:15-17 の解説である。

## ゼカリヤ

「時に主は大祭司ヨシュアが、主の使の前に立ち、サタンがその右に立って、これを訴えているのをわたしに示された。主はサタンに言われた、「サタンよ、主はあなたを責めるのだ。すなわちエルサレムを選んだ主はあなたを責めるのだ。これは火の中から取り出した燃えさしではないか」。ヨシュアは汚れた衣を着て、み使の前に立っていたが、み使は自分の前に立っている者どもに言った、「彼の汚れた衣を脱がせなさい」。またヨシュアに向かって言った、「見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう」。わたしは言った、「清い帽子を頭にかぶらせなさい」。そこで清い帽子を頭にかぶらせ、衣を彼に着せた。主の使はかたわらに立っていた。」—ゼカリヤ 3:1-5

ヨシュアと天使の経験は、聖徒たちの裁きに適用されることを E. G. ホワイトははっきりと言っておられる:

「ヨシュアとみ使いに関するゼカリヤの幻は、贖罪の大いなる日の、最後の場面における神の民の経験に、特別に当てはまる。その時、残りの教会は大きな試練と苦悩に陥る。神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持っている者に対して、龍とその軍勢は激しい怒りを発する。サタンは世界を自分の家来だと思っている。彼は多くの自称キリスト者たちさえ支配してしまった。しかしここに、小さい群れが彼の主権に抵抗しているのである。もしサタンが、彼らを地上から一掃することができるならば、彼の勝利は完璧となる。サタンは異教諸国を動かしてイスラエルを滅ぼそうとしたように、近い将来、地上の邪悪な国々を扇動して、神の民を滅ぼそうとするのである。人々は神の律法に背いて、人間の布告に服従するように要求されるのである。

.....

神の民が神の前で心を悔まし、心が純潔になることを嘆願するときに、『彼の汚れた衣を脱がせなさい』という命令が出される。そして、『見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう』という励ましの言葉が語られる(ゼカリヤ3:4)。キリストの義というしみのない衣が、試練と誘惑に耐えた忠実な神の民に着せられる。さげすまれた残りの民は栄光の衣を着せられ、世俗の腐敗に二度と汚されることはないのである。彼らの名は小羊の命の書に書き留められて、各時代の忠実な者の中に加えられるのである。彼らは、欺瞞者の策略に抵抗した。彼らは龍がほえても、忠誠を失わなかった。今や彼らは、誘惑者の計略から、永遠に安全なものとなった。彼らの罪は、罪の創始者の上に移された。『清い帽子』が彼らの頭にかぶせられた。

サタンが告発をしていたときに、目には見えないが、聖天使たちがあちこち行きめぐって、忠実な人々に生ける神の印を押していた。」—国下 193-196<sup>11</sup>

## エレミヤ

「主は言われる、その日その時には、イスラエルのとがを探しても見当らず、ユダの罪を探してもない。それはわたしが残しておく人々を、ゆるすからである。」—エレミヤ 50:20、大下 217

<sup>11</sup> 5T 472-476(国下 193-196)までE. G. ホワイトはどのように裁きに適用しているか、文脈全体を読んでいただきたい。

## ペテロ

「だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。それは、主のみ前から慰めの時(refreshing 回復, 活気づけ) がきて、あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを、神がつかわして下さるためである。」—使徒行伝 3:19

罪の除去と慰めの時(回復の時、新改訳)は、キリストの働きに協力して信仰によって聖所に入る者たちに与えられる力ある仲保者の祝福である。靈感の言葉は「〔調査審判において〕主のみ前からくる慰めの時にあなたの罪が除去され、そしてイエスを使わず」と言っている。<sup>12</sup>

## ヨハネ

「わたしは、もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて、大声で言った、『神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め。』」—黙示録 14:6, 7

さばきを通して教会に与えられる祝福を描写して、ヨハネは「この後、わたしは、もうひとりの御使が、大いなる権威を持って、天から降りて来るのを見た。地は彼の栄光によって明るくされた」黙示録 18:1。数世紀も前に、イザヤは「見よ、暗きは地をおおい、やみはもろもろの民をおおう。しかし、あなたの上には主が朝日のごとくのぼられ、主の栄光があなたの上

<sup>12</sup> 大争闘下 382(1888年版)、かっこは原文にある。



にあらわれる」と言った。イザヤ 60:2。この栄光とは何か？一神のご品性である—TM499。この教会に輝く栄光をヨハネは生ける神の印であると言っている：

「また、もうひとりの御使が、生ける神の印を持って、日の出る方から上って来るのを見た。彼は地と海とをそこなう権威を授かっている四人の御使にむかって、大声で叫んで言った、

『わたしたちの神の僕らの額に、わたしたちが印をおしてしまうまでは、地と海と木とをそこなってはならない』。

わたしは印をおされた者の数を聞いたが、イスラエルの子らのすべての部族のうち、印をおされた者は十四万四千人であった。」—黙示録 7:2-7

E. G. ホワイトは、裁きが生ける神の印をもたらすとはっきり言っている (6T 130)。この印は単なる天の帳簿上の記録ではない。神の民の額に置かれるということは、人間の知性に神のみ像が完全に回復されるということの意味している (7BC 926、国下 196、6BC 1118、TM 506 参照)。「この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである」。

預言者たちはどのように裁きと罪の除去を描写しているかをまとめてみよう：

レビ 16:30—「主のみ前に清められる」、ダニエル 8:14—「聖所はきよめられる」、マラキ 3:3—「レビの子孫を清める」、イザヤ 4:4—「シオンの娘たちの汚れを洗い」、ヨエル 2:25—「かみ食らういなごの食った年をわたしはあなたがたに償う」、ゼカリヤ 3:4—「汚れた衣を脱がせなさい」、エレミヤ 50:20—「イスラエルのとがを

探しても見当らず、ユダの罪を探してもない」、使徒 3:19—「あなた方の罪が除去される、黙示録 7:4—「印された者の数は 144,000」。

マルチン・ルター  
Martin Luther



## 清いがまだ清くない

しかし、ここで質問！「神の民は義認と聖化の過程を通して、裁きの前に完全に清められているのではないか？」ある人は次のように断言する：

「まず第一に、腐敗した罪の原則、悪の源、罪深い性質は信者の改心後も潜在意識の中に残っていると言うことは新生の経験の本当の性質を拒むことである。

第二に、腐敗した罪の原則、悪の源、罪深い性質は潜在意識の中に、最後の贖いの日まで残ると言うことは今日しなければならぬ働きを延期することになる。あるご婦人が今日生活から罪を「除去」しなければならぬと私が主張したのでショックを受けたと言った。彼女はこれは最後の贖いの働きだと信じていた。」—アラン・スターケー<sup>13</sup>

我々の聖書は、「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」と言っている。ここに潜在意識の罪は別であるとは言っていない。」—世界総会原稿委員会<sup>14</sup>

### 反対にウィーランド-ショートは言う：

「信者が『救われた』その後も心の中にずっと残っている罪に関しては更に深い漸進的な聖化が呼びかけられていることは常にある。彼はすべての知っている罪から清められているが、しかし潜在意識のすべての罪か

<sup>13</sup> Alan Stakey, manuscript, p8,9,1968 年、世界総会 Defense Literature Committee 出版。この原稿「プリンズミードの基本的な教え」というもので、ロバート・プリンズミードの教えを論破する目的で出版された。

<sup>14</sup> 「第三回ウィーランド-ショート原稿委員会報告」“警告とその受け入れ” p390。この世界総会の原稿委員会の報告はウィーランド-ショートの原稿「1888 年再吟味」を論破しようとして書かれたもの。これは世界総会に、1950 年に提出された。

らではない<sup>15</sup>

どの考えが正しいのだろうか？この問題に対する正しい理解の鍵は、ルターが表現したように“SIMUL JUSTI ET PECCATORES”、すなわち改心した聖徒は「義であると同時にまだ不義である」と、これが真理である。<sup>16</sup> この4つの言葉は最も有名で宗教改革者の信仰による義認の教理のはっきりした表現である。E. G. ホワイトはこのプロテスタントの大前提を十分に支持している、—①まず第一に信者は神の前に全く義であることを維持すること(実物 143、キ道 82)、—②そして義人は「彼らの罪深さを告白する」という事実である(患下 264)。彼らは自分自身は「過ち多く、無力で、罪人である」と認めつつ、「生来の罪との戦い」を続けていく。キリストに近づけば近づくほどもっと完全に自らの不完全に気づくのである(5T 48、RH 1887 年 11 月 29 日、キ道 86)。彼らは「自我と人間の心の腐敗との絶えざる戦い」をずっと続ける。主の使命者は更にこうも言っている：

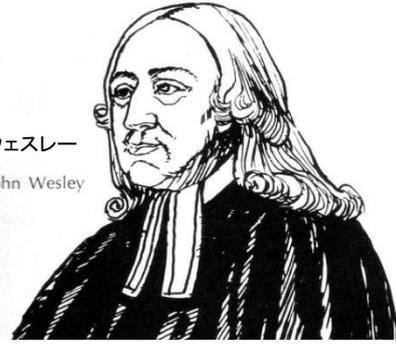
「宗教儀式や祈り、讃美や悔悟の念から来る罪の告白は、香のように真の信徒から天の聖所へと上って行くが、人性という墮落した器を通してなされる。捧げられるこれらのものはあまりに汚れているため、血によって清められない限り、神にとって価値あるものとは決してなり得ない。上っていても汚れない純潔なものではないので、すべて神の右に座しておられる仲保者の義によって、提示され清められない限り、神に受け入れられるものとはならない。地上の幕屋から立ち上る香はすべて、キリストの血という清めの滴でぬらされていなければならない。」—1SM 344

<sup>15</sup> 同上

<sup>16</sup> マルチン・ルター:Early Theologica Works, TheLibrary of Christian Classics, Vol. XVI, p. 324.

ジョン・ウェスレー

John Wesley



この「義であると同時に不義である」ということはゆるされ、生まれ変わったクリスチャンにある確かな証拠ではないだろうか？彼らは義であると同時に不義であり、清いが同時に清くない、純潔であるが同時に不潔である。このことを理解をしていないと、神の言葉も日ごとのクリスチャン経験の現実も意味を見いだせなくなる。

福音はすべての罪深さから完全に、すぐ清める力があるのだから、新生した聖徒はすでにきよめられていて、それ以上の清めを必要としないという議論は、カトリック神学者たちがマルチン・ルターと戦ったのと同じことをしていることになる。かの偉大な神の僕は、ヴァルトブルクにいたとき、彼を攻撃したカトリックのチャンピオン、ラトマスの議論を論破するためにペンを取った。ラトマスが攻撃した2点は次のことであった：

1. 「バプテスマの後も罪は残る」
2. 「この世の巡礼にある聖徒のすべての良き行いは罪である」<sup>17</sup>

よく知られているように、ルターはゆるし、新たに生まれ変わらせ、清めるキリストの血の力を信じた。しかし、カトリックの反対者たちは、聖徒たちは清められているのだから、彼らがなす行いは、いさおしがあると挑戦した。その議論は、恵みが与えられる以前の功績にあてられたのではなく、恵みが与えられた以後のことについてであった（つまり、クリスチャンになって後）。ルターは、聖徒たちの良き行いには何の功績もない、なぜなら彼ら自身はなおも罪深いからであることを示した。「すべての罪は洗い去られたがなおも洗いを必要とする何

かが残っている」と言った。<sup>18</sup> イザヤ 64:6、詩篇 143:2、伝道 7:20、1 コリント 4:4、ローマ 6、8 章や他の聖句を引用して、改革者は、罪は新生した者のなかに腐敗した性質というかたちで残っているというプロテスタント信仰を擁護した。

「この世の巡礼にある聖徒のすべての良き行いは罪である。... すべての良い業は罪である。... 我々の良い行いは神の裁きに堪えない。... 神のあわれみが我々の上に支配し、ゆるしが提供されなければ、我々の良い行いなどというものは、良いといわれない。... 聖徒たちは義であると同時に不義である。こうして彼は己の義に頼るのでなく、神のあわれみにのみ頼ることを示している。... 原則は固く立つ。再度繰り返すが、良い行いそのものは、もし恵みの雲が取り除かれたら、清くないものである。神のゆるしの憐みがあるときにのみ純潔とされ、賛美とほまれに価するものとなるのである。... こうして神は我々を心にかけて下さる素晴らしいお方なのである。神は二つのことを保証しておられる。第一に、良い行いは、はっきりと見えることを教えておられる。御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、親切、善意(ガラテヤ 5:22)、そしてその実によって知るであろう」(マタイ 7:20)。第二に、絶対確実なことは、これらの良い行いは、我々がそれに頼るとき、罪のしみが無いというわけにはいかない。それゆえに、我々がなすすべての良い行いの中にも我々は罪人であり、あわれみを必要とする存在であることをいささかも疑ってはならない。...

神は我々をまだ死から、罪から解放してはおられないが、終わりには解放して下さる。

<sup>17</sup> 同、p317, 318

<sup>18</sup> 同

なぜなら、我々はまだ死ななければならないし、罪のうちに戦わなければならないからである。しかし、神は我々を罪と死の法則から解放してくださった。つまり、罪と死の支配と君主から解放してくださった。その結果、罪はなお我々に存在するが、しかしその猛威をふるうことも何もできない。...

忠実な者から憐みを取り除くなら彼らは罪人であり、ほんとうに罪を持っている。しかし、憐みの支配の下に信じ生きるなら、罪のもとに断罪とされず、そして罪は彼らのうちに死に続けるなら、その事の故に彼らは罪を負わせられない。...そこで我々は信じる、すべての罪のゆるしは、成し遂げられた。このことに関してはいささかも疑いはない。しかし、毎日の義務をやり続けるとき、すべての罪の廃棄はなおも当然期待するし、罪からの解放をなおも前途に期待するのである。

そこで、私はこれが私の教えであると宣言する。だれでもすべての良い行いをしたとしても、罪はなおも追放されないで存在するのである。...自分のうちの純潔を誇ることなくむしろ神の恩寵と賜物を誇りとする、これが私の教えだ。...どんな一つの行為にも「罪のない」ものがあるだろうかと詭弁家たちに問いたい。いかなる人でもこれは私の良い行いだと無謀に言える人はいないと信じる」<sup>19</sup>

大宗教改革者の言葉を長々と引用したが、これが彼の最も基本的なプロテスタントとしての考えであった。それはレビ 16:30 の明確な真理を拒み、新生した聖徒はすでに清められたのであると主張する者たちはプロテスタント信仰の最も初期の思想を拒むことであることを示すためであった。ジョン・ウエスレーとすべての真のプロテスタンティズムのチャンピオ

ンたちも実質的には同じであった。ウエスレーの「信者の内の罪」という説教で彼は、今日レビ 16:30 の真理を拒む多くの人々によってもたらされる同じ反対にこたえている。彼は言った:

「信者に罪がないとか、肉の心、背教の傾向がないという立場は、神の言葉に、またその子らの経験に反する。背教に傾く心、生来の悪への傾向、神から離れようとする傾向、地上の事柄に執着する傾向を絶えず彼らは感じる。彼らは日毎に高慢、わがまま、不信という罪が残っていることに気づく。語ったり、行ったり、たといそれが最上の行動や聖なる義務であろうとそれに固守しようとする罪にきづく。しかし同時に彼らは『神に属する者であることも知っている』。彼らはそれに対するいささかの疑いもない。彼らは主の御霊が「彼らの霊と共に神の子らであることを証している」こともはっきりと感じる。彼らは「キリスト・イエスを通して贖いを受けたことを喜ぶ」。彼らは彼らの内に罪は存在することが確かであるように、「栄光の望みであるキリストが彼らの内にいる」ことも確信する」<sup>20</sup>

「キリストは罪が支配するところを支配することは確かにできないし、一つの罪でも許されている限り彼は支配なさらない。しかし、あらゆる罪と戦っているすべての信者の心におられ、お住みになる。たといそれが聖所の清めに従ってまだ清められていなくとも」<sup>21</sup>

「信者は罪責と罪の力から解放されていることは、我々は認める。彼らがその存在から解放されていることになると、我々はそれを

<sup>19</sup> 同、p. 318-354

<sup>20</sup> ジョン・ウエスレー, Wesley's Sermons, p12, 13.

<sup>21</sup> 同, p. 13.

拒否する」<sup>22</sup>

「我々が義認されたとき、すべての罪は破壊された、その瞬間から全く清いとある人は真面目に信じている。『すべて神から生れた者は、罪を犯さない』ことは確かである。しかし、罪が彼らの内に存在するを感じないということは容認できない。それは支配しない。しかし、それは残っている。我々の心の中に罪は残っているという確信は、我々がいま語っている悔い改めの大きな位置を占めるものである」<sup>23</sup>

「それゆえに、使徒パウロは、コリントの信者たちでさえ「あなたがたの肉の心、背信、わがまま、怒り、復讐、世への愛、確かにあらゆる悪、苦みの根の心は、抑制が取り除かれるとすぐ現われてくる、心の腐敗は深いものであり、神からの光がなければおそらく考えることができない。すべての罪が彼らの心に残っているという確信は、義認されている者たちに属する悔い改めである」<sup>24</sup>

贖いの日に関して言えば、聖徒たちは「義であると同時に不義である = SEMUL JUSTI ET PECCATORES」状態で裁きに出頭することは明らかである。彼らは義とされた民であることは、次の証拠から明らかである：

1. 型によると、民はすでに罪を告白し、最後の贖いのために備えるためにすべての個々の罪は捨て去っている。
2. ペテロは「慰めの時が来る時」罪が除去される者たちは、悔い改めによって準備していなければならない(使徒 3:19)と言っている。

<sup>22</sup> 同, p. 21.

<sup>23</sup> 同, p. 33, 34.

<sup>24</sup> 同, p. 41.

3. マタイ 22 章の婚姻のたとえで、裁きの時に「礼服」を着ていない者たちは投げ出された。この婚礼の衣は「キリストの義、汚れのない品性」である(実物 290)。
4. 「すべての国民が神の前で審判を受けるのであるが、しかし神は、あたかもこの地上にその人一人しかいないかのように、厳密に一人一人を審査されるのである。すべての者が調べられねばならない。そして、しみもしわもそのたぐいのものがいっさいあってはならないのである。」

一方また聖徒たちは、裁きの座に罪人として出頭する。その証拠は下記のごとし：

1. 型において民は、深い悔い改め、断食、魂のざんげをもって聖所に来ることが要求された。清く聖なる神の前に血と香によってのみ立つことができた。
2. ゼカリヤのたとえで、神の民はヨシュアによって表わされている。彼らは「汚れた衣」を着ている。E.G.ホワイトは、ゼカリヤ 3 章を説明して、これは裁きの時の描写であり、彼らの着ている「汚れた衣」は「聖徒たちの罪の結果得た欠点のある品性」であると言っている。さばきに彼らが出頭するとき、神の民は「自分たちの生活の罪深さを完全に意識している」。彼らは「魂を悩まし、心の純潔を懇願する」—国下 193-196。
3. 「実体のこの大いなる贖いの日に、神のみ前において、悔い改めと罪の告白の立場に身を置く者だけが、神の保護に値するものとして認められ、注目されるであろう」—TM 445。
4. 「自らの霊的退歩を嘆き、他人の罪を嘆かない者は神の印から漏れたままに残されるであろう」—5T 211。

聖徒たちは、裁きの座の前に「礼服」を着て出頭するだろうか、それとも「汚れた衣」のまま出頭するだろうか？ 彼らは両方を着て出頭するのである！ マタイ 22 章は、ゼカリヤ 3 章と矛盾しているのではない。それは、ルターが言った聖徒たちは「義であると同時に不義である」<sup>25</sup> ということを実証しているにすぎない。ウェスレーが「罪は支配しないが、残っている」と言ったのは正しかった。<sup>26</sup> また、E. G. ホワイトも聖徒たちは罪を犯さなかったかのように神の前に受け入れられるが、彼らは自分たちの性質の罪深さを告白すると言っている（キ道 82、患下 264）。

このプロテスタントの基本的な真理の面前で、新生した者は清められた状態だからさらなる清めは必要でないと信じられるだろうか？ ウェスレーが言ったように、この誤った主張は神の言葉と、神の子らの経験に反することである。<sup>27</sup>

今日、あまりにもひどい偏見が神の民を現代の真理から目をそらすようにしている。同じことがキリストの時代のユダヤ人たちにも見られた。それは残りの教会に対する警告である（1SM 406、1SM 387、2SM 111 参照）。レビ 16:30 の真理を破壊することは、プロテスタント主義の基礎全体を破壊することである。アドベンチスト主義は、ルターによってはじめられた改革を破壊するのではなく、また新しい基礎を築くことではなく、完成することになっているのである（生残 393、大争闘上 81）。

今日の贖いの日のメッセージは、神の民を悔い改めと魂のへりくだりによって、型の贖いの日のように、聖所に集めるのである（大下 22、224）。人が罪を告白しゆるされ、清められたの

だから、もはや魂を悩ます必要がないというのは宗教改革者たちが述べ伝えた教えではない。

<sup>28</sup>

確かに、神が「あなたがたの魂を悩ませ」と言われるとき、教会にとってはうれしいことではないであろう。今日の教会がレビ 16:30 にある特別な清めは必要でないと言うなら、それが今日のラオデキヤ状態であることの証しである。「自分をきよいと見、汚れを洗わない世代がある。」箴言 30:12（新改訳）<sup>29</sup>。

<sup>26</sup> 同, p. 34.

<sup>27</sup> 同, p. 12.

<sup>28</sup> 「義認された聖徒についてルター曰く：「こうして我々は罪人であることを告白し、涙とごんげと悲しみとをもって我々は罪人であることを示すのである」Lectures on romans, p. 135 .

<sup>29</sup> （会衆を叱ったということで）コラの偽りの哲学者たちは「全会衆は、ことごとく聖なるものである」と言った。民数紀 16:3.

## キリストの再臨の時に 道徳的に変えられることはない

レビ記 16:30 に書かれている神の民の清めに反対する他の人々は、新生した聖徒らには罪が残っていないと主張することを擁護できないと知ると、今度は全く反対の誤りに陥ってしまう。罪から完全に解放されることは、再臨の時まで不可能であると教え、レビ記 16:30 を信じる者はディスペンセーションナリズム (神の定めた制度の時代) の異端であると攻撃する。この教えは、すべての罪深さが信者から今、ここで直ちに清められるという教理とは全く相矛盾するものである。それでいて、驚くべきことに、これらの両方の相反する教えは同じ人々によってなされているのである。

しかし、再臨の時に罪は除去されると信じる人々は、獅子から逃れたかと思うと、今度はクマが彼らを待ち構えている。プロテスタント主義によって堅く建てられた基礎を壊すことができないので、彼らは今度はアドベント主義の最も基本的な前提を破壊しようとする—すなわち、聖所は再臨前に清められること、最後の世代は道徳的に完成され、印され、神の大いなる日に仲保者なしに生きることができるという教理を破壊しようとするのである。E. G. ホワイトは明言している：

「キリストが (二度目に) 来られる時、我々の罪を清め、我々から品性の欠点を取り除くことはなさない。…彼らの欠点を取り除いて清い品性を与えるどんな働きもなされない。清めるお方は罪と腐敗を取り除くご自分の精錬の働きをなさるお仕事にたずさわれない。これはすべてこの恩恵期間になさなければならない。この働きは今我々のためになさなければならない。—2T 355

「キリストがおいでになる時、我々の卑しい体は変えられ、彼の輝かしい体のようにされる。しかし、その卑しい品性は、その時、清くされることはない。品性の改変は、彼がおいでになる前に起こるのである。我々の性質は純潔で清くなければならない。我々の魂

にご自分のみ像が反映されるのを主が喜びをもってごらんになるために、我々はキリストの心を持たなければならない。」—OHC 278

攻撃されているこの柱—基本的なアドベント主義—は、プロテスタント主義の柱と同じように堅固である。この二つは分離できない、同じ岩の上しっかりと埋め込まれている—信仰による義である。

## 道徳的清めか？

## 儀式上の清めか？

解決されなければならない問題は、レビ記 16:30 は道徳的清めか、儀式上の清めかという点である。レビュー・アンド・ヘラルド 1964 年 7 月 30 日 13 ページにレビ記 16:30 について、R. F. コットレルの記事が掲載された：

「レビ記 16:30 の『清める』『清められるであろう』の表現は、常に(例外なしに)礼典のまたは儀式上の清めを意味している。Taher-タヘルは罪からの道徳的な清めに決して用いられていない。…

レビ記 16:30 を道徳的な清め、すなわち、ゆるし、道徳的罪責からの解放を意味するとするなら—それはヘブル語によって決して表現されていない、行き過ぎた解釈である。それは決して聖霊の意図するところではない。さらに聖書と預言の霊の説明している贖いの日の奉仕の性質と目的を誤解したものである。あの厳粛な日に共同体としての清めは、個人の生活から罪を取り除くこととは関係のないことであり、それは、その日に行われる特別な奉仕の前にすでに起こっていたのである。

したがって、レビ記 16:30 を今天で進行しつつある実体の大いなるあがないの日の間、神の民の道徳的な清めに適用したり、あるいは肉における道徳的完全と解釈することは、聖書を歪曲することである。」

数週間後にレビュー・アンド・ヘラルドの編集者は、N. C. ネイデンの記事の脚注として次のように書いていた：

「ある人は、レビ記 16:30 の言葉を誤って適用した。すなわち、『この日(あがないの日)にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである』という言葉は道徳的清めに適用した。彼らは実体のあがないの日に神の民の道徳的清めがなされるという誤った結論を出している

のである。『清める』という言葉はヘブル語の taher という言葉であるが、常に儀式上の、あるいは礼典上の清めにのみ用いられている。Taher は罪からの道徳的清めという意味には決して用いられない。

レビ記 16:30 を道徳的清め、すなわちゆるしや道徳的罪責からの清めに用いることは、ヘブル語の表現ではあり得ないことであり、聖霊の意図するところではない。従って、レビ記 16:30 を実体の贖いの日に神の民が道徳的に清められると結論づけるのは論拠薄弱である」<sup>30</sup>

このような言明が教団の印刷物に掲載されたのはまことに残念なことである。なぜなら、レビ記 16 章で語られている型におけるあがないの日の清めは、実体の贖いの日に実際に行われることを表しているからである：

「地上の聖所の務めにおいて、型として行なわれたことが、天の聖所の務めにおいて、現実に行なわれるのである。」—大下 135

ヘブル語の taher タヘルは、儀式上の清めに用いられているが、同じように実際に道徳的清めにも用いられていて、ダビデは祈った：「ヒソブをもって、わたしを清めてください、わたしは清くなるでしょう。わたしを洗ってください、わたしは雪よりも白くなるでしょう」詩篇 51:7。<sup>31</sup> デスモンド・フォード博士も 1965 年 12 月号の “Ministry” に適切に説明している：

「taher タヘルは、儀式上の清めに主に用いられていることは確かだが、覚えていなければならないことは、聖所のすべての儀式は、重要な教訓を与える教科書であるというこ

<sup>30</sup> RH, 9-10, 1964, p. 4

<sup>31</sup> エゼキエル 36:25,33; 37:23 にも「清める」 taher は道徳的清めに用いられている。

## 結論

とである。イスラエル人によってもたらされた儀式上の汚れは、キリストの血による清めの必要をもたらした罪という伝染病の象徴であった。従って文脈上ある場合はただ単に儀式上の汚れだけでなく、道徳的清めにも関係していたのである(ヨブ 4:17、詩篇 51:2)。

<sup>32</sup>

型としてのあがないの日は全イスラエルが参加する共同体としての出来事であったが、しかし、準備には個人的に魂を悩ますことが要求されていた。同じように、実体の贖いの日に現代の霊的イスラエルは個人的に主との経験を持っている者のみが祝福にあずかるのである。最後のあがないの条件を満たさない者は「断たれる」のであった(レビ 23:27-32)。

聖書と預言の霊の研究によると、裁きの時の間になされる最終的罪の除去は、天の記録からだけでなく、神の子らの生活からも罪が除かれることを教えている。改心の時に最終的に、完全に罪の除去が行われると信じることは、プロテスタント主義の根本を拒むことであり、再臨まで罪の除去は起こらないと主張するならば、アドベント主義の基本を拒むことである。

レビ記 16:30 の真理に予表されている輝かしいメッセージは、希望のメッセージであり、罪の奴隷からの最終的救出のメッセージである。神の民が教会に持っておられる天の目的を理解するときのみ、神の大いなる日に立ち得る信仰を持つことができるのである(大下 222)。

---

<sup>32</sup> デスモンド・フォード、The Linguistic Connection Between Daniel 8:14 and 11:31,

もしも大いなる、最後の贖罪の日が理解されることになっているなら、人の性質、特に罪に冒された人性を理解することが不可欠となる。

アダムの墮落により、人性は心身ともに汚された。人間という生物体に腐敗と死の種がまかれ、こうして肉体的、知的、道徳的力が弱められた。これだけでなく、罪は人心を腐敗させ、知性を汚し、精神を墮落させたのであった。

サタンは「首尾よくアダムに罪を犯させ、こうして人性は根底から腐敗した」(RH1901年4月16日)。アダムからの生命の流れにより、同じ性質の腐敗が継承されていくことは避けられなかった。その種にしたがって産出するというのが生命の法則である(創1:11, 21, 24-25)。アダムのすべての子らは、外なる人(肉体)と内なる人(心や知性または精神)の両方の退化において彼の性質を帯びる。こうして「ひとりの人の不従順によって、多くの人が罪人とされた」(ローマ5:19)のである。

肉の生まれであるすべての人は罪深い。すなわち、生まれながらの罪人である。どうしてそうなったかを知ることは、その現実そのものを知ることほど重要ではない。子供は、その子が行為において罪を犯した後、罪人になるわけではない。むしろ、その子は初めから罪人であるが故に、罪の行為に及ぶのである。肉の生まれであるすべての人は、行為によらず、性質による罪人なのである。罪の行為は、腐敗した木で育った実にすぎない。仮に生まれながらの罪人が罪の行為に及ばなかったとしても、その人が罪人であることに変わりはなく、神との交わりに全くふさわしくない者であり、イエスの血によって清められない限り救いにあずかることはない。次に、すべての人が罪深い性質を受け継いだという基礎的な真理を支持する霊感の言葉を紹介する。

「心はよろずの物よりも偽るもので、はな

はだしく悪に染まっている。誰がこれを、よく知ることができようか」(エレミヤ17:9)。

「…肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである」(ローマ8:7)。

「主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりであるのを見られた」(創世記6:5)。

「さてあなたがたは、先には自分の罪過と罪とによって死んでいた者であって、…ほかの人々と同じく、生まれながらの怒りの子であった」(エペソ2:1-3)。

「見よ、わたしは不義のなかに生まれました。わたしの母は罪のうちわたしをみごりました」(詩篇51:5)。

「悪しき者は胎を出た時から、そむき去り、生まれ出た時から、あやまちを犯し、偽りを語る」(詩篇58:3)。

「すなわち、ひとりの人の不従順によって、多くの人が罪人とされたと同じように、ひとりの従順によって、多くの人が義人とされるのである」(ローマ5:19)。

「子供たちが受けついでいるものは罪という遺産です。罪は彼らを神から離してしまいました」(家教514)。

「イエスの清めの力を経験したことのない子供たちは、法律上敵のえじきであり、悪天使たちが容易に近づけるようになっている」(CT 118)。

「罪の故に彼〔アダム〕の子孫は、生来の不従順の傾向をもって生まれてきた」(SBN 207)。

「人の心のうちには、生来の利己心と腐敗がある」(4T 496)。

「第一のアダムに言われた通り、人間はアダムから罪と死の宣告以外の何ものも受け

## 原罪と宗教改革者

ていない」(SBN 334)。

上の御言葉より、次のことが明らかである。

1. すべての人は、生まれつき罪を持っている。
2. この罪は表現〔行為〕のうちには存在するのではなく、性質そのものうちに存在する。カシの木がどんぐり(種)に由来するように、すべての罪の行為は罪の性質に由来する。<sup>1</sup>
3. 腐敗した「木」は、じきにその悪い「実」によって自らの状態を明かすことになる。「実」が「木」を粗悪にするのではなく、「木」が「実」を粗悪にする。
4. このように、罪はその二つの側面〔生来の罪と行為の罪〕において考察されるべきである。信徒は、「古き人をその行いと一緒に脱ぎ捨て」るべきであると、パウロは述べている(コロサイ3:9)。

最初に「原罪」という表現を用いたのは、アウグスチヌスであった。アダムの罪の結果として、人類に罪の性質が遺伝されていったことを意味する言葉であった。アダムの墮落した性質がどのように彼の子孫に遺伝されていたかについて、アドベンチストはアウグスチヌスに賛同しないかもしれないが、人が墮落した心と肉の思いをもって生まれるという点については賛同しないわけにはいかない。

「原罪」という表現を用いることは、「三位一体」という表現を用いることと同様、さほど重要ではない。しかし、偉大な宗教改革者たちがどのような信念に基づいて戦っていたのかを正しく認識するためにも、彼らが「原罪」という言葉を用いたときに意味していたことと、「原罪」について彼らが説いていたことを知ることは、大きな手助けになる。

### ルター

「・・・それ〔原罪〕は悪への傾向である」。<sup>2</sup>

「原罪とは、悪である事を行おうとする我々の遺伝された傾向であり、善である事を行おうとする我々の嫌悪と無力さのことである」。<sup>3</sup>

「我々は、パウロがローマ書5:12で述べているように、罪がアダムという一人の人から起こり、彼の不従順によってすべての人が罪人とされ、死と悪魔に従属する者となったことを告白しなければならない。これが原罪または大罪と呼ばれている。この罪の実が、後に悪行として現れる。それらは不信、偽の信仰、偶像崇拜、神を畏れぬこと、傲慢、盲

<sup>1</sup> 「罪深い性質」というのは、弱められた肉体的、知的、道徳的能力を持つ退歩した人間の組織を意味しているのではない。そうではなく、正しくは神学的な用語では、内なる霊的な人のことであり、生来の利己主義、腐敗、本来の魂の邪悪さを指している。

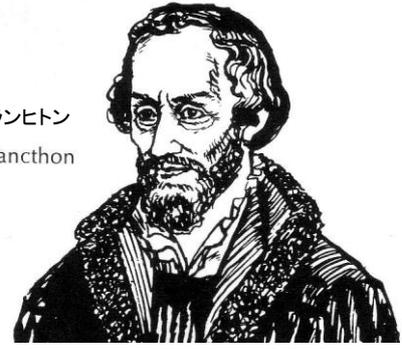
<sup>2</sup> マルチン・ルター、lecture on Romans, p. 167.

<sup>3</sup> 同、Luther's Small Catechism, p. 40.

ジョン・カルバン  
John Calvin



メランヒトン  
Melancthon



目、そして簡潔に述べれば、神を知らず尊重しないこと、神の言葉を尊重しないこと、両親に逆らうこと、殺人、不貞、盗むこと、欺くこと等々の、十戒で禁じられている事柄である。この遺伝による罪はあまりにも深く性質が腐敗しているため、いかなる分別をもってしてもそれを理解することはできず、ただひたすらに御言の啓示を信じなければならない。<sup>4</sup>

主にメランヒトンによって作成された **1530年のアウグスブルグ（プロテスタント）の信仰告白**は、ルターの神学だけでなく、一般的なプロテスタント神学を言い表したものであった。

「我が教会は、満場一致で・・・アダムの墮落以来、すべての人は罪の性質を持って生まれてくることを説く。それはすなわち、神を畏れず、神に信頼せず、強い肉欲を抱き、そしてこの病または生まれながらの悪徳がまさに罪であり、今でもバプテスマと聖霊によって生まれ変わらない者たちに有罪判決を下し、彼らに永遠の死をもたらしている」。<sup>5</sup>

## カルバン

「従って原罪は、魂全体に拡散した遺伝的な腐敗であり、墮落した性質であるように思われる。それが、そもそも我々を神の怒りに触れる者とし、さらに聖書が『肉の働き』（ガラテヤ 5：19）と呼ぶところの働きを我々に行わせているのである。そしてそれこそ、パウロがしばしば罪と呼んでいるものである。姦淫や不品行、盗み、憎しみ、殺人、大酒などはそれから出てくるものであり、それ故に

彼は「肉の働き」と呼んでいるのである。それらも聖書において、またパウロ自身によっても罪と呼ばれてはいるが・・・

アダムの罪により我々は神の裁きを受けねばならないと言われているからには、あたかも我々は罪がなく裁きに該当しないのに、彼の罪責を負ったのではなく、我々は彼の違反を通して呪いに陥ったという意味において、彼は我々を有罪としたことを理解すべきだからである。にもかかわらず、アダムからの刑罰が我々に臨んだばかりでなく、彼から伝達された接触感染が我々のうちに宿っている。それが我々を刑罰に価する者とするのである。・・・また使徒自身も、最も雄弁に『すべての人が罪を犯したので、死が全人類には入り込んだ』ことを証している（ローマ 5：12）。つまり彼らは原罪によって包まれ、そのしみによって汚されているわけである。それ故に、幼児でさえも、母親の胎内にいる時から有罪宣告を受けており、それは他者の過失の故にではなく、自分自身の過失の故に有罪なのである。なぜなら、彼らの罪の実はまだ現れていなくても、彼らのうちに罪の種がまかれているからである。いかにも、彼らの全性質が罪の種であり、故に、神にとってそれは憎むべきもの、忌まわしいものでしかあり得ない。この事から、それは神の御目に罪と見なされることになる。なぜなら罪がなければ告発もないからである」。<sup>6</sup>

母の胎から生まれ出たすべての人に属する、墮落した罪深い性質を意味するのに、宗教改革者たちが「原罪」という言葉を用いたことは明らかである。このような原罪の概念は、根本主義のクリスチャンであるならば誰もが信じるはずである。<sup>7</sup>

<sup>4</sup>同、Smalcald Articles, Part Three, Sec. 1, Book of Concord, Vol. p. 321.

<sup>5</sup> Luther's Small Catechism, p. 90 に引用。

<sup>6</sup> ジョン・カルビン、Institutes of the Christian Religion, The Library of Christian Classics, Vol. XX, p. 251.

<sup>7</sup> M. L. アンデレアセンが「しかしながら、アドベンチストとして、

## 原罪と再生



改心していない生涯においては、心と意思の罪深い性質が完全な支配権を握っている。人を回心させる恵みから離れては、生まれながらの人がなすことはことごとく罪である。人の思考、宗教、信心、熱意、働き、正義などはことごとく罪である。自由になるために頑張る奮闘するかもしれないが、生まれながらの人は自らの罪深い性質の完全な奴隷なのである。

回心は、「ほとんどの人が正しく認識していないところの」(2T 294) 大きな働きである。イエスの信者は生まれ変わって新たな者となる(ヨハネ 3:3、2コリント 5:17)。彼は神の性質にあずかり、神の子となる(2ペテロ 1:4、ヨハネ 1:12)。彼はキリストの血によって義とされ、彼の罪は神の寛容によって大目に見られる(ローマ 5:9、3:25)。彼は「再生の洗いを受け、聖霊により新たにされる」(テトス 3:5)。彼は、パウロによって描かれている者たちの一員となる。「・・・しかし、あなたがたは、主イエス・キリストの霊によって、洗われ、きよめられ、義とされたのである」(1コリント 6:11)。神の愛が彼の心の中に注がれ、彼の肉体そのものが聖霊の宮となる(ローマ 5:5、1コリント 3:16)。「新しい誕生は、新しい動機、新しい好み、新しい傾向を持つことから成り立つ」(SBN 391)。罪はもはや信者の朽ちるべき肉体において主権を持たない(ローマ 6:12)。なぜなら、自由を得させる神の恵み

---

我々は原罪ということ信じない」(Letters to the Churches, p. 56) という言明をしたことは、残念なことである。勿論、アンデレアセンは、すべての者は墮落した心と精神を持って生まれるということは信じた。では、彼が言おうとしたのは何であったのか？カトリックとあるプロテスタントはアダム個人の罪の罪責がその子孫に帰せられたと信じた。アドベンチストは父から子に罪責が帰されるということは信じない(エゼキエル 18:20、あ上 357)。宗教改革者のほとんどもそうであった。アンデレアセンは「セブンスデー・アドベンチストは原罪の罪責を含むこれらの説を信じない」というべきでた。レイモンド・コットレルも同じように、レビュー・アンド・ヘラルド 9-23, 1965, p. 13 に誤解されることを書いた。プロテスタント根本主義はその記事を見てセブンスデー・アドベンチストは現代のペラギウス派と結論づけるであろう。

が、彼の生涯において原罪の支配権を打ち崩すからである(ローマ 8:2)。

キリストの血の力と効力は過小評価されるべきものではなく、次の重要な質問が上げられるべきである。

再生という日々の経験は、原罪(罪の性質)を根絶するだろうか？神から生まれた者たちのうちに何らかの罪はあるのか？それとも、彼らは罪から全く解放されたのだろうか？各時代の聖徒たちの証は何を語っているだろうか？

### モーセ

「・・・地はあなたのために呪われ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る」(創世記 3:17)。

地は人の心を例証しており(エレミヤ 4:3、ホセア 10:12、マタイ 13:8)、墮落の後に変えられた地の状態は、墮落の後に変えられた人の心の状態を例証している。

「罪のない夫婦が、悪を知ることは、神のみこころではなかった。神は、彼らに善を惜しみなく与えて、悪はさしひかえておられた。それなのに、彼らは神の命令に反して、禁じられた木の実を食べてしまった。こうして彼らは、それを一生の間食べ続け、悪の知識をもつことになるのであった。このとき以来、人間はサタンの誘惑に悩まされることになった」(あけぼの上 48)。

「かつては神のご品性、すなわち善の知識だけが書かれていたところに、今はそれと共にサタンの品性である悪の知識が書きしるされている」(教育 17)。



「善悪を知る木の実を食べた結果は、すべての人間の経験にあらわれている。人の性質には、悪への傾向、すなわち自力だけでは抵抗し得ない一つの力が働いている」(教育 21)。

アダムが罪を悔い改めた後、神のかたちが完全に回復されたわけではなかった。彼は二度と再び、神の御顔を見ることができなかった。罪により彼の性質は邪悪なものとなり、今や彼は一生の間、心の罪への傾向と戦うことが求められた。丁度、呪われた地の悪い種やとげ、雑草と戦うことが求められたように。

## ソロモン

「善を行い、罪を犯さない正しい人は世にいない」(伝道 7 : 20)。

「だれが『わたしは自分の心を清めた、わたしの罪は清められた』と言うことができますか」(箴言 20 : 9)。

## ヨブ

「見よ、わたしはまことに卑しい者です、なんとあなたに答えましょうか。ただ手を口に当てるのみです。・・・それでわたしはみずから恨み、ちり灰の中で悔います」(ヨブ 40 : 4, 42 : 6) (その同じヨブが全く正しい者であったと言われていた—ヨブ 1 : 1)。

## ダビデ

「だれが自分のあやまちを知ることができますか。どうか、わたしを隠れたとがから解き放ってください」(詩篇 19 : 12)。

「・・・しもべのさばきにたずさわらないでください。生ける者はひとりもみ前に義とされないからです」(詩篇 142 : 2)。

「主よ、あなたがもし、もろもろの不義に目をとめられるならば、主よ、だれが立つことができますでしょうか」(詩篇 130 : 3)。

## イザヤ

「われわれはみな汚れた人のようになり、われわれの正しい行いは、ことごとく汚れた衣のようである・・・」(イザヤ 64 : 6)。

「わざわざいなるかな、わたしは滅びるばかりだ。わたしは汚れたくちびるの者で、汚れたくちびるの民の中に住む・・・」(イザヤ 6 : 5)。

## ダニエル

「わたしがこう言って祈り、かつわが罪とわが民イスラエルの罪をざんげ・・・していたとき」(ダニエル 9 : 20)。(この祈りを捧げた頃のダニエルは潔白な神のしもべであった)。

「それでわたしひとり残って、この大いなる幻を見たので、力が抜け去り、わが顔の輝きは恐ろしく変わって、全く力がなくなった」(ダニエル 10 : 8)。

## パウロ

「わたしは自ら省みて、なんらやましいことはないが、それで義とされているわけではない・・・」(1 コリント 4 : 4)。

『『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった』という言葉は、確実に、そのまま受け入れるに足るものである。わたしは、その罪人のかしらなのである』(1 テモテ 1 : 15)。

「そこで、この事をしているのは、もはや

わたしではなく、わたしの内に宿っている罪である。・・・もし、欲しないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である。・・・すなわち、わたしは、内なる人としては神の律法を喜んでいるが、わたしの肢体には別の律法があって、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、・・・」(ローマ7:17, 20, 22-23)。

「わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく、ただ捕らえようとして追い求めているのである。そうするのは、キリスト・イエスによって捕えられているからである」(ピリピ3:12)。

## ヨハネ

「しかし、神が光の中にいますように、わたしたちも光の中を歩くならば、わたしたちは互いに交わりを持ち、そして、御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちを清める〔ギリシア語：清め続ける〕のである」(1ヨハネ1:7)。

## ヤコブ

「わたしたちは皆、多くのあやまちを犯すものである・・・」(ヤコブ3:2)。

## ルター

「クリスチャンの内にある原罪は、その人が死ぬまで残る・・・」。<sup>8</sup>

8 マルチン・ルター、Table Talk, CCLVI.

「これらの人々〔パウロ、ヒエロニムス、キプリアヌス〕やあらゆる聖徒たちの生涯と告白は、ローマ書7章におけるパウロの言葉を証明している。『すなわち、わたしは、内なる人としては神の律法を喜んでいるが、わたしの肢体には別の律法があ』る。それは、罪がなおも地のすべてのバプテスマを受けた聖なる人たちのうちにあり、それと戦わねばならないことを誰も否定することができないためである」。<sup>9</sup>

「しかし我々は、恵みの行使と誇りの屈服、またでしゃばりの抑制がなされるため、霊の人のうちに罪が残されていることを知るべきである」。<sup>10</sup>

「バプテスマ後も罪は残る。すべての罪は洗い流されるが、なおも洗われる必要のある何かが残される。・・・聖徒たちがこの世の放浪者である限り、彼らのあらゆる善行は罪である。・・・聖徒たちは義であると同時に、不浄な者でもある」。<sup>11</sup>

## ウェスレー

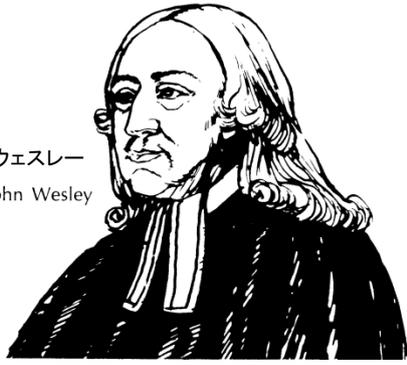
「そしてこの立場を取れば、信者のうちに罪はなく、肉の思いもなく、墮落する傾向もないことになり、これは神の言葉と神の子らの経験に反している。彼らは絶えず、墮落する性向のある心と生来の邪悪な性癖、神から離れようとする傾向とこの世のものへの執着心があるのを痛切に感じている。彼らは日々、心の中に留まっている罪、誇り、我意、不信、また彼らのあらゆる言動、最善の行為や最も神聖な義務にさえもまつわりつく罪

<sup>9</sup> 同、Works of Martin Luther, Vol. III, p. 17-19.

<sup>10</sup> 同、Luther: Lectures on Roman, p. 212.

<sup>11</sup> 同、Luther: Early Theological Works, The Library of Christian Classics, Vol. XVI, p. 317-324.

ジョン・ウェスレー  
John Wesley



E・G・ホワイト  
E. G. White



を自覚している。が、それと同時に、自分たちが神に属する者であることを知っており、その事を一瞬たりとも疑うことはできない。彼らは、御霊が明らかに、彼らが神の子であることを彼らの霊と共に証しているのを感じる。彼らはキリスト・イエスにより、神にあって喜ぶ。今や彼によって贖いを受けているからである。そういうわけで彼らは、罪が自分たちのうちにあること、栄光の望みであるキリストも彼らのうちにあることを、等しく確信しているのである」。<sup>12</sup>

「確かにキリストは罪が支配しているところを支配することはおできにならず、いかなる罪が承認されているところにも住まわれることはない。しかしキリストは、あらゆる罪と戦っているすべての信者のうちにおられ、そこに住んで下さる。その心がまだ、聖所の清めの型に準じて清められていなくても」。<sup>13</sup>

「信者は我々が認める罪責と罪の力から解放され、我々が拒絶する罪の存在から解放される」。<sup>14</sup>

「・・・[罪は] 支配しなくても、そこに残る」。<sup>15</sup>

## ホワイト

「イエスに近づけば近づくほど、ますます欠点が多く見えてきます・・・」(キ道 86)。

「生まれつきの罪との格闘があり、外部の悪との戦闘がある。」—RH 1887 年 11 月 29 日

「人の心の中には生まれつきの利己主義

と腐敗がある」—4T 496。

「我々は外部の悪と内部の罪に対し日々戦いを挑まねばならない。」—RH 1882 年 5 月 30 日

「使徒にしても、預言者にしても、自分には罪がないと主張した人は一人もいない。神に最も近く生活した人、知りつつ罪を犯すよりは、むしろ生命を犠牲にした人、また、神からの特別の光と力を与えられた人は、みな自分たちの性質の罪深いことを告白している。」—実物教訓 140

「しかし、この経験が自分の経験であるからといって、クリスチャンは自分のためになし遂げられたことに満足して、手をこまねいてはならない。霊の王国に入ることを決意した人は、生まれ変わっていない力と熱情が、やみの王国の勢力に後押しされて、こぞって神に反対することを知らぬであろう。彼は毎日、献身を新たに、悪と戦わねばならない。古い習慣、罪を犯そうとする生来の傾向が、支配力をふるおうとするであろうから、これらに対していつも油断なく見張り、勝利を得るためにキリストの力によって戦わねばならない。」—患下 170

先に挙げた各時代の聖徒たちの証から、ヘッペンストールやフォードといった学者は、彼らの記事が通常の、日毎のクリスチャン経験に当てはめられていたなら、極めて正しいと言える。

「クリスチャンは、なおも彼のうちに悪の泉、墮落した性質が残っていることを知っている。」—エドワード・ヘッペンストール<sup>16</sup>

「清められた信者のうちには罪があるが、彼の上には罪がない。キリストの上には罪が置かれていたが、彼のうちには罪がなかった。

<sup>12</sup> . ジョン・ウェスレー、Wesley's Sermons, p. 12, 13.

<sup>13</sup> . 同、p. 13.

<sup>14</sup> . 同、p. 21.

<sup>15</sup> . 同、p. 34.

<sup>16</sup> エドワード・ヘッペンストール、Sings of the Times, 12-1963, p. 30.

それはつまり、回心したすべての魂は、なおも戦うべき古い性質を持っており、この源から彼は絶えず誘惑を受ける。・・・ローマ 7:14-23 とガラテヤ 5:17 を読みたい。」—デズモンド・フォード<sup>17</sup>

いったん、原罪は再生した聖徒たちのうちに残るとの真理が把握されれば、聖徒たちの善行ですら罪に汚れている。<sup>18</sup> と力説したルターの真意をたやすく理解するであろう。ウェスレーも同様に、聖徒たちの最善の行為や最も神性な義務にさえも罪がまつわりつくこと証した。ホワイ夫人は、真の信者の祈りや賛美、宗教行為でさえも、人性という腐敗した経路によって汚されているため、イエスがご自身の血で彼らを清めない限り、神に受け入れられる者とはならないと宣言した。

さらに、キリストの着せられる義がすべての善行の不純と欠乏に適用される場合にのみ、今ここでなされる完全な服従は可能となるのである。<sup>19</sup>

「キリストの義のかおりによってはじめ、人は完全に従順になることができる。キリストの義は従順な行為の一つひとつを神の香気で満たす。」—患下 232

「キリストの着せられる義という功績を通して、このような言動の香気は永久に保たれる。」—SD 270

「しかし、墮落前に樂園にて神がアダムに要求しておられたことを、この時代の神に従おうとするすべての人に要求しておられる。それはすなわち、神の律法への完全な服従で

ある。但し、非の打ちどころのない義は、キリストの着せられる義を通してのみ得られる。」—RH 1901年9月3日

主がご自分の民に、聖化のための十分な猶予期間を与えられさえすれば、原罪は根絶され得ると推測するのは、重大な誤りである。神からの命令はすこぶる明白ではないだろうか？「地はあなたのために呪われ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る」。

「人は墮落してしまった。そして、その墮落から回復し、キリストを通して、罪と継続される違反によって失われた神のかたちを取り戻すための働きは、長かろうが短かろうが、一生かかるものとなるであろう」(2T 448)。

「人は生けるかしらなるキリストへと成長することができる。それは一瞬の働きではなく、生涯の働きである。神の生命のうちに日毎に成長することによっても、恩恵期が終わるまではキリストにある完全な人の背丈に達することはないであろう」(4T 367)。

従って、各時代の聖徒たちと同じく、通常の、日々の経験において、罪深さがことごとく除去されることはないと断言できる。この概念が、罪から清める神の力を限定することはなく、かえって信仰によって、神が知恵のうちに、謙虚さと罪を忌み嫌うこと、神の義のみに依存することを教えるため、ご自分の民をそのような状態に<sup>20</sup> 留め置かれることを受け入れるのである。品性は闘争によって形づくられるものであり、クリスチャンの闘争においては、己の罪深い心との戦いが大部分を占めるのである。

<sup>17</sup> . デズモンド・フォード、Sings of the Times (Australasian edition), 8-1, 1967.

<sup>18</sup> 同、p. 22, 23

<sup>19</sup> 与えられる義によって信者は、服従する力を頂く。しかし、服従という行いは、墮落した人間の器によって服従の行為はによって汚されている。

<sup>20</sup> 「罪の状態」は、罪の行為ではない。生まれ変わった信者は罪を行わない。(1ヨハネ 3:9)

エドワード・ヘッペンストール  
Edward Heppenstall

テイラー  
Taylor



## 原罪と再臨

あるセブンスデー・アドベンチストは、宗教改革者たちの説いた、原罪が死ぬまで残るといふプロテスタントの大黒柱を倒そうと試みる過ちを避けながらも、もう一方の過ちを犯している。それは、罪がキリスト再臨の時まで聖徒たちのうちに残ると主張することである。

### エドワード・ヘッペンストール

「古き人は、我々に死が訪れる日、またはキリスト来臨の日まで残る。が、信仰の導き手であり、またその完成者であられるキリストを仰ぐ限り、罪と自我は勝つことができない。・・・再生した人のうちにも悪の泉が残っていて、聖徒たちから朽ちる肉体が脱がされるまで、彼らのうちには常に罪が存在すると、クリスチャンは信じている。・・・この原罪はクリスチャンであろうとなかろうと、死ぬか天に移されるまで彼らのうちに残る」。<sup>21</sup>

「ここに我々は、現世における罪なき完全に対する最も厳粛な警告を見出す。クリスチャンは、なおも彼のうちに悪の泉、墮落した性質が残っていることを知っている」。<sup>22</sup>

### テイラー・バンチ

「ウェブスターは完全を、品性に罪がなく傷がなく、出来上がった、十分に成長した、最高の期待を満足させる、十分な成熟に達した状態と定義している。神学的な見地からすると、完全とは、罪から自由な状態が現世において到達可能か、すでに到達されたとする

教理であると述べられている。・・・イエスがおいでになる時にのみ我々は完全な者とされ得ることを、我々は覚えているべきである」。<sup>23</sup>

### ラルフ・ワッツ

「我々が現世において罪なき完全に到達することは決してない」。<sup>24</sup>

### デズモンド・フォード

「清められた信者のうちには罪があるが、彼の上には罪がない。キリストの上には罪が置かれていたが、彼のうちには罪がなかった。それはつまり、回心したすべての魂は、なおも戦うべき古い性質を持っており、この源から彼は絶えず誘惑を受ける。・・・ローマ7：14-23 とガラテヤ5：17 を読みたい。我々の古い性質は、我らの主がおいでになる時、すなわち栄化の時、最終的に滅ぼされるであろう。その時、我々のうちにも上にも罪がなくなるのである」。<sup>25</sup>

このような概念は、アドベンチズムの柱、すなわちイエスがおいでになる前に聖所が清められるとする教えを倒そうとするものである。しかし、ダニエル8：14が立っている限り、キリストがおいでになる前に聖徒たちからすべての罪が除かれねばならないと説く真理も立ち続ける。

次に、五つの事実を挙げる：

#### 1. 聖徒たちに関する限り、イエスがおいで

<sup>21</sup> . 「罪の状態」は、罪の行為ではない。生まれ変わった信者は罪を行わない。(1ヨハネ3:9)

<sup>22</sup> . エドワード・ヘッペンストール、Definitions of Righteousness (Lessons used at Andrews University), p.18, 20.

<sup>23</sup> . 同、Sings of the Times, 12-1963, p.11, 30.

<sup>24</sup> . テイラー・バンチ、Ministry, 12-1965, p.7, 9.

<sup>25</sup> . ラルフ・ワッツ、RH, 5-19, 1966, p.4.



デズモンド・フォード  
Desmond Ford

R・S・ワッツ  
R. S. Watts

になる前に聖所が清められ、すべての罪が除去されねばならない。これを否定することは、ダニエル 8:14 とアドベンチズムの土台そのものを否定することである。

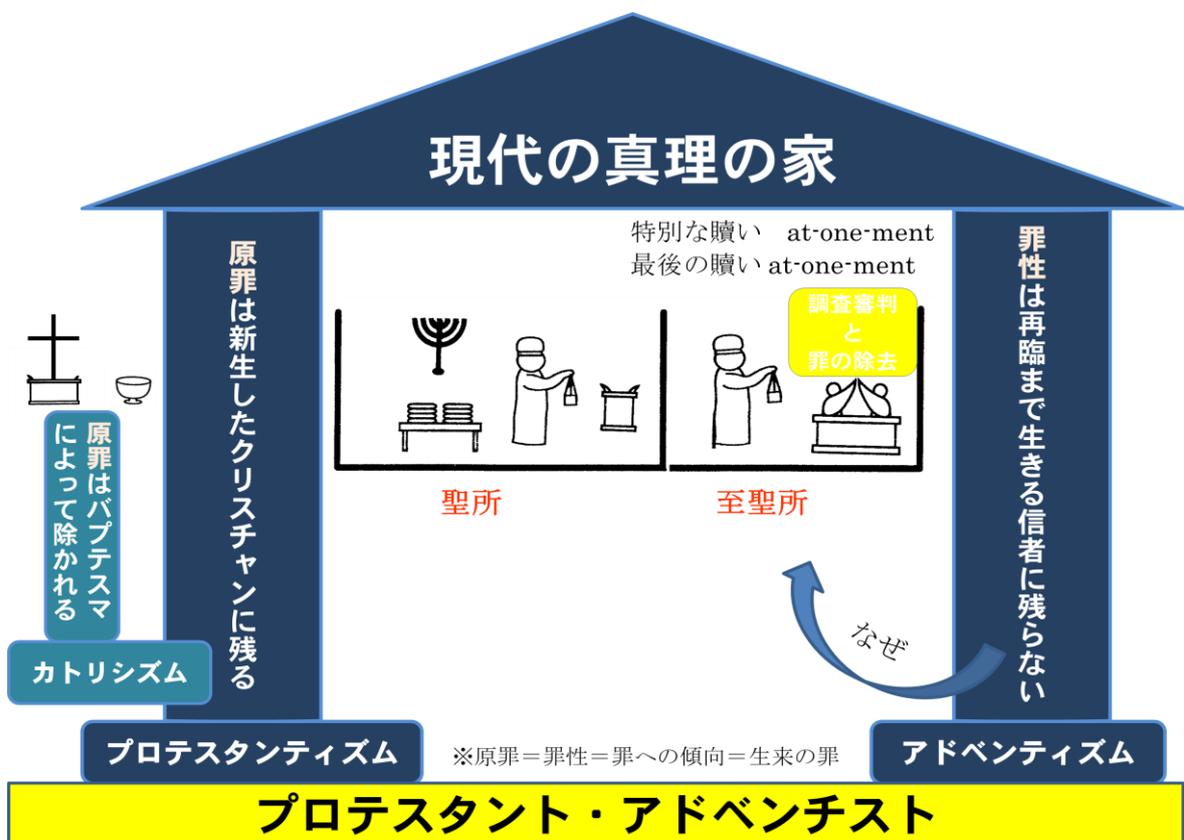
2. パウロは、キリストが「罪を負うためではなく、罪から離れて」二度目に現れて、救いを与えられる」と断言している(ヘブル9:28)。再臨ではなく、主のみ前から慰めの時がくる時に、罪は終わり、除去されねばならない。
3. 人類の恩恵期間が最後に閉じられた後、聖徒たちは仲保者なくして、聖なる神の御前で生きなければならない(初文149)。この最終世代に関する経験上の概念は、ダニエル8:14とヘブル9:28に本来備わっているものである。再生した聖徒たちは、たとえ罪の行為を犯さなかったとしても、彼らのうちに罪がなくなるわけではない。彼らはまだ、聖所における仲保者なくして生きる備えはできていないのである。罪深い性質を持つ人は誰でも、聖所における仲保者と絶えざるキリストの血の適用を必要としている。罪深い性質が残っているので、聖徒たちの祈りでさえも、仲保者のとりなしなくして神に達することはできない。しかしイエスは、ご再臨の時までずっと民のためにとりなし、ご自身の血をもって彼らを清められるわけではない。
4. キリストがおいでになるまで生き残る者たちは、神の御子の御前に立ち、彼の顔を見なければならぬ(イザヤ25:9、2テサロニケ2:8)。人はその罪深い状態にあって、この経験の栄光に耐えることはできない(出33:18-20)。さらに、最終世代が再臨の時に栄化されるという事実は、朽ちるべき肉体が再臨の時に変えられることの証拠にしかない。
5. イエスがおいでになる時まで聖徒たち

のうちに罪が残るとの主張は、ジェームズ・ホワイトから ML・アンデレアセンに至るアドベンチズムの擁護者たちの教えと相容れない。本書の著者が研究・調査した限りでは、この新しい教えが先代のセブンスデー・アドベンチストによって提起されたという記録は、一例も見つかっていない。

ダニエル8:14の意味するところは、キリストの再臨前にすべての罪が対処され、聖徒たちから根絶されるということである。

## 原罪と最後の贖い

プロテスタント主義とアドベント主義の大黒柱は両立する。前者は原罪が再生した者のうちに残るとの真理を確立し、後者はそれが主の来臨まで生存する者の内にいつまでも残ることはないと明言する。これらの大黒柱を押し倒そうとするサムソンたちはどこにいるのだろうか？ 彼らはダゴンの神殿ではなく、天の聖所の二つの部屋を崩そうとしているのである。





今や、サタンは「自分の時が短いのを知って」、プロテスタント主義とアドベンチスト主義の二大柱を崩そうとしている。特に「万事がかかっている大真理」—至聖所における「最後のあがない」「特別なあがない」—の真理を崩そうとしている(大争闘下 221-222 ; 初代 410, 413)。プロテスタント諸教会は完全崩壊寸前である。セブンスデー・アドベンチストは最後のプロテスタントのとりでである。宗教改革を完成させるのは「神の戒めを守り、イエスの証を持つ」「残りの女=レムナント=真のセブンスデー・アドベンチストである(黙示録 12:17)。

すべての罪の除去はどこでなされるのだろうか？

「イエスは、ダニエル書 8 章の 2300 日の終わり、すなわち、1844 年に、天の至聖所にはいり、彼の仲保の働きによって恵みにあずかるすべての者のために最後の贖いをなし、こうして、聖所をお清めになるのであった。」—初代 413<sup>1</sup>

あと 120 年以上たっても、セブンスデー・アドベンチストはイエスの最後のあがないについて知らないということはあるだろうか？それは至聖所でなされるのである。イエスが裁きにおいて各人の名前を取り上げられる時、新生した聖徒たちのためになされる(大下 211, 212)。「このあがないは死んだ義人たちと同様に生ける義人のためにもなされる」(初文 415)。それは死んだ義人たちのためになされ、彼らはキリストが来られる時、原罪なくして復活するであろう。しかし、生きている義人はキリストの最後の贖いの栄光と力を生きていて経験するであろう：

「この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである」—レビ 16:30。

「その来る日には、だれが耐え得よう。そのあられる時には、だれが立ち得よう。彼は金をふきわける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである。彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる」—

<sup>1</sup> .これは、預言の霊と矛盾しない—「死は肉体の死滅をもたらすが、品性には何の変化ももたらさない」5T466. 真のクリスチャンは、常にキリストにあって完成という立場を持っている。死はこれを変えるものではない。最後のあがないのゆえに、彼らは同じ完全な品性で復活するのである。

マラキ 3:2, 3。

「その日、主の枝は麗しく栄え、地の産物はイスラエルの生き残った者の誇、また栄光となる。

そして主が審判の霊と滅亡の霊とをもって、シオンの娘らの汚れを洗い、エルサレムの血をその中から除き去られるとき、シオンに残る者、エルサレムにとどまる者、すべてエルサレムにあって、生命の書にしるされた者は聖なる者となえられる。(3 節に合節) その時、主はシオンの山のすべての場所と、そのもろもろの集会との上に、昼は雲をつくり、夜は煙と燃える火の輝きとをつくられる。これはすべての栄光の上にある天蓋であり、あずまやであって、昼は暑さをふせぐ陰となり、また暴風と雨を避けて隠れる所となる」—イザヤ 4:2-5。

「しかし審判が行われ、彼の主権は奪われて、永遠に滅び絶やされ」—ダニエル 7:25。

「だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい」—使徒 3:19。

「幕屋の奥には大祭司が年に一度だけはいるのであり、しかも自分自身と民とのあやまちのためにささげる血をたずさえないで行くことはない。それによって聖霊は、前方の幕屋が存在している限り、聖所にはいる道はまだ開かれていないことを、明らかに示している。この幕屋というのは今の時代に対する比喩である。すなわち、供え物やいけにえはささげられるが、儀式にたずさわる者の良心を全うすることはできない。

いったい、律法はきたるべき良いことの影をやどすにすぎず、そのものの真のかたちをそなえているものではないから、年ごとに引きつづきささげられる同じようないけにえによっても、みまえに近づいて来る者たちを、全うすることはできないのである。もしでき

たとすれば、儀式にたずさわる者たちは、一度きよめられた以上、もはや罪の自覚がなくなるのであるから、ささげ物をするのがやんだはずではあるまいか。彼は一つのささげ物によって、きよめられた者たちを永遠に全うされたのである。

聖霊もまた、わたしたちにあかしをして、「わたしが、それらの日の後、彼らに対して立てようとする契約はこれであると、主が言われる。わたしの律法を彼らの心に与え、彼らの思いのうちに書きつけよう」と言い、さらに、「もはや、彼らの罪と彼らの不法とを、思い出すことはしない」と述べている。これらのごとに対するゆるしがある以上、罪のためのささげ物は、もはやあり得ない」—ヘブル 9:7-9、10:1, 2, 14-18。

「主は言われる、その日その時には、イスラエルのとがを探しても見当らず、ユダの罪を探してもない。それはわたしが残しておく人々を、ゆるすからである」—エレミヤ 50:20。

「ヨシュアは汚れた衣を着て、み使の前に立っていたが、み使は自分の前に立っている者どもに言った、『彼の汚れた衣を脱がせなさい』。またヨシュアに向かって言った、『見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう』。わたしは言った、『清い帽子を頭にかぶらせなさい』。そこで清い帽子を頭にかぶらせ、衣を彼に着せた。主の使はかたわらに立っていた。」—ゼカリヤ 3:3-5

「イスラエルの残りの者は不義を行わず、偽りを言わず、その口には欺きの舌を見ない。それゆえ、彼らは食を得て伏し、彼らをおびやかす者はいない。…主はあなたを訴える者を取り去り、あなたの敵を追い払われた。イスラエルの王なる主はあなたのうちにいます。あなたはもはや災を恐れることはない。」—ゼパニヤ 3:13, 15

「神の民が神の前で心を悩まし、心が純潔になることを嘆願するときに、『彼の汚れた衣を脱がせなさい』という命令が出される。そして、『見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう』という励ましの言葉が語られる(ゼカリヤ 3:4)。キリストの義というしみのない衣が、試練と誘惑に耐えた忠実な神の民に着せられる。さげすまれた残りの民は栄光の衣を着せられ、世俗の腐敗に二度と汚されることはないのである。彼らの名は小羊の命の書に書き留められて、各時代の忠実な者の中に加えられるのである。彼らは、欺瞞者の策略に抵抗した。彼らは龍がほえても、忠誠を失わなかった。今や彼らは、誘惑者の計略から、永遠に安全なものとなった。彼らの罪は、罪の創始者の上に移された。「清い帽子」が彼らの頭にかぶせられた」—5T 475(国下 196)。

調査審判においてキリストが聖徒たちのために何かをなされるということは明らかである。ただ審査の働きだけでは、あがないの働き、清めの働きもなされるのである(211)。靈感の言葉はこれ以上はつきりさせることができるだろうか? 「この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである」レビ記 16:30。「彼の汚れた衣を脱がせなさい。見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう」ゼカリヤ 3:4。

主は何の力によってこのような大変化を聖徒たちに起こさせるのだろうか?

「わたしは、何がこのような大きな変化をもたらしたのかをたずねた。『それは後の雨、主のみ前からの慰め、第三天の大いなる叫びである』と天使は言った。」—初代 440

「季節の終わり近くに降る後の雨は穀物を熟させ、刈り入れに備える。…穀物が熟するということは、魂の中に神の恵みのみ業が

## 結論

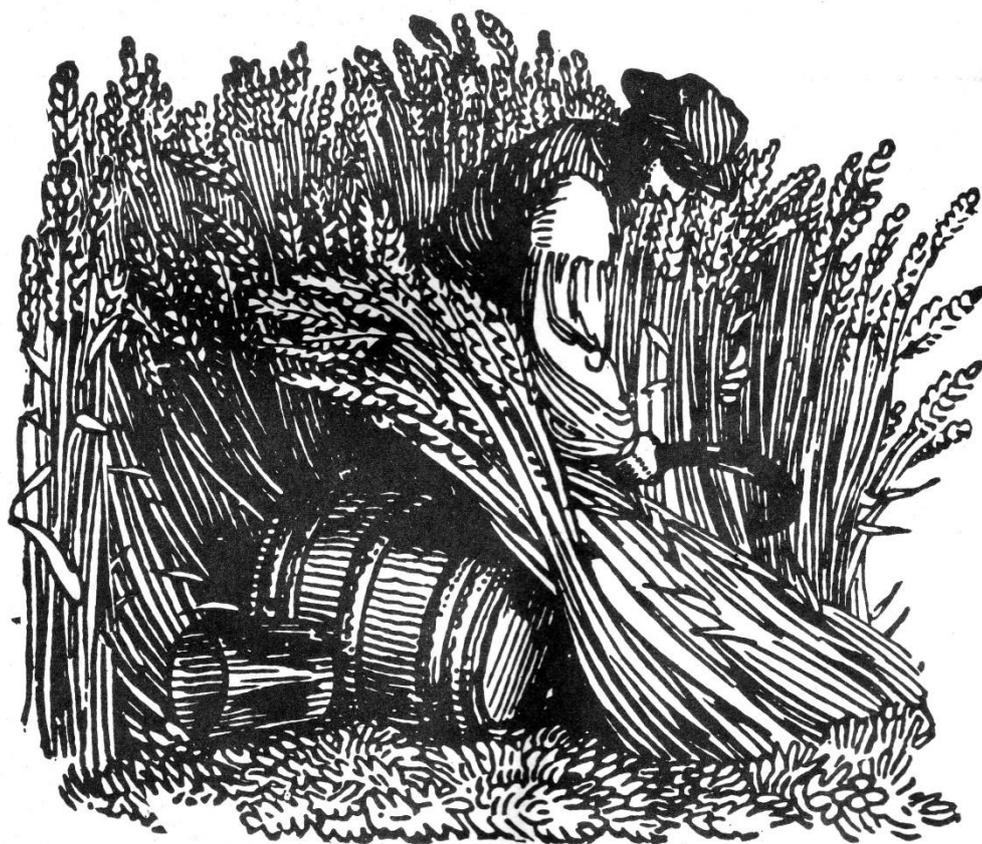
完結することを表している。聖霊のみ力によって神の道徳的かたちが品性に完成されるのである。われわれは全くキリストに似たものに変えられる。...先の雨がその働きをしないならば、後の雨は完全の実を成熟させることはできないのである。」—TM 506

ダニエル 8:14 は、プロテスタントの信仰による義認という教理、すなわち罪は支配しないがそれは聖徒の中に残るという教理を補足して完成するものである。後の雨によって印される働きにおいて(その経験は調査審判の祝福である)、罪はもはや支配しないし残らない。ダニエル 8:14 は、原罪の問題に対する神の最後の解答である。そういうことでアドベント主義こそ、宗教改革の働きを完成するものである。今こそ神はこの最後の清めの働きに入るように呼びかけておいでになる。古代イスラエルが聖所の周りに、祈りと魂を悩ますことによって集まったように、現代イスラエルも天における大祭司の働きの性質を理解しなければならない(大争闘下 221、222、149)。彼らは裁きの場に從っていかなければならない。

神の民はどのように裁きの場に来るのであろうか？ ルターが言ったように、キリストにあつて義であると同時に不義である故に、なお魂を悩まし「心の純潔を求めて」、裁きに出頭するのである(5 T475、国指導下 196)。裁きの戸は開いている(黙示録 3:8)。神の民は、そこに入ってくるように招待されている(ヘブル 10:19-21)。すべては用意ができています(マタイ 22:4)。—ラオデキヤの心以外はすべて用意ができています。天の神よ、「招かれた者たちはふさわしくなかった！」という言葉が発せられる前にあなたの教会を覚醒してください！現代のイスラエルは聖所の周りに集まるようにとのヨエルの差し迫った呼びかけに応答するように：

「シオンでラッパを吹きならせ。断食を聖別し、聖会を召集し、民を集め、会衆を聖別し、老人たちを集め、幼な子、乳のみ子を集め、花婿をその家から呼びだし、花嫁をそのへやから呼びだせ。主に仕える祭司たちは、廊と祭壇との間で泣いて言え、『主よ、あなたの民をゆるし、あなたの嗣業をもろもろの

国民のうちに、そしりと笑い草にさせないで  
ください。どうしてもろもろの国民に、『彼  
らの神はどこにいるのか』と言わせてよいで  
しょうか』 —ヨエル 2:15-17。



「二千三百日までである。  
そして聖所は清められて  
その正しい状態に復する。」  
—ダニエル